

## 4 章 二子山古墳・山本古墳の発掘調査

### 1 節 既往の調査

二子山古墳は、宇治川東岸の仏徳山から北に伸びる丘陵、通称二子山と呼ばれる丘陵上にある2基の古墳の総称で、北にある古墳を北墳、南にある古墳を南墳と呼ぶ。昭和41（1967）年、丘陵の土砂採取工事が行われ、この頃初めて発見された古墳である。発見されたときには、すでに工事は古墳の裾に迫っており、京都府教育委員会は事業者に対して工事の中止方の通知を出した。その後二子山古墳発掘調査委員会が組織され、国庫補助事業として昭和43年2月から発掘調査が実施され、多量の副葬品が出土している。

### 昭和42年発掘調査に至る経過

調査に至る経過を概述すると、昭和41年8月に二子山古墳の西麓で大規模な土砂採掘工事が開始された。古墳の裾に土取工事が及び始めた同年10月、京都府教育委員会から事業者宛に工事の中止についての通知がされた。これが二子山古墳発掘調査の発端である。昭和42年4月に京都府教育委員会・宇治市教育委員会・事業者の三者協議が行われ、発掘調査については合意できたものの経費負担については調整がつかなかった。昭和42年7月には、大雨により土砂流出の危険がある旨地元より申し出があった。昭和42年8月、京都府教育委員会と協議の上、予算原案を作成する。昭和42年10月、二子山古墳発掘調査委員会規程を定め委員会を組織する。また発掘調査範囲の立木調査を行う。昭和42年12月、古墳に影響のない部分での事業者による土砂採掘を指導する。昭和43年1月、第1回二子山古墳発掘調査委員会が開催される。昭和43年2月19日、第2回二子山古墳発掘調査委員会が開催され、この日を現地調査の開始日とし午後から発掘準備にとりかかる。

以上のように、二子山古墳の発掘調査は土砂採掘工事による古墳崩壊の危険性が生じたことを契機として、その保全にかかる緊急発掘調査として実施された。

### 北墳

北墳は直径40m、高さ4.3mを測る円墳で、段築は確認されていない。築造方法は丘陵頂部北側を円墳形に削り出した後、上部に盛り土を行い成形している。外表施設として墳丘裾と墳頂部外周に埴輪列が圍繞する。円筒埴輪には黒班が認められる。家形や盾形・甲冑形などの形象埴輪片が確認できるため、墳頂にこれらが樹立されていたとみてよい。墳丘裾部で葺石が確認されている。

北墳の埋葬施設は、墳頂中心部で南北軸の3基の埋葬施設が並列配置された状況で確認されている。このうち、中央槨と東槨は大型同一墓壙に埋葬され、西槨は追葬されている。埋葬順は東槨が最初で、次いで中央槨、最後に西槨となっている。東槨は墳丘中心に位置するもので、



図 12 宇治二子山古墳・山本古墳の位置図

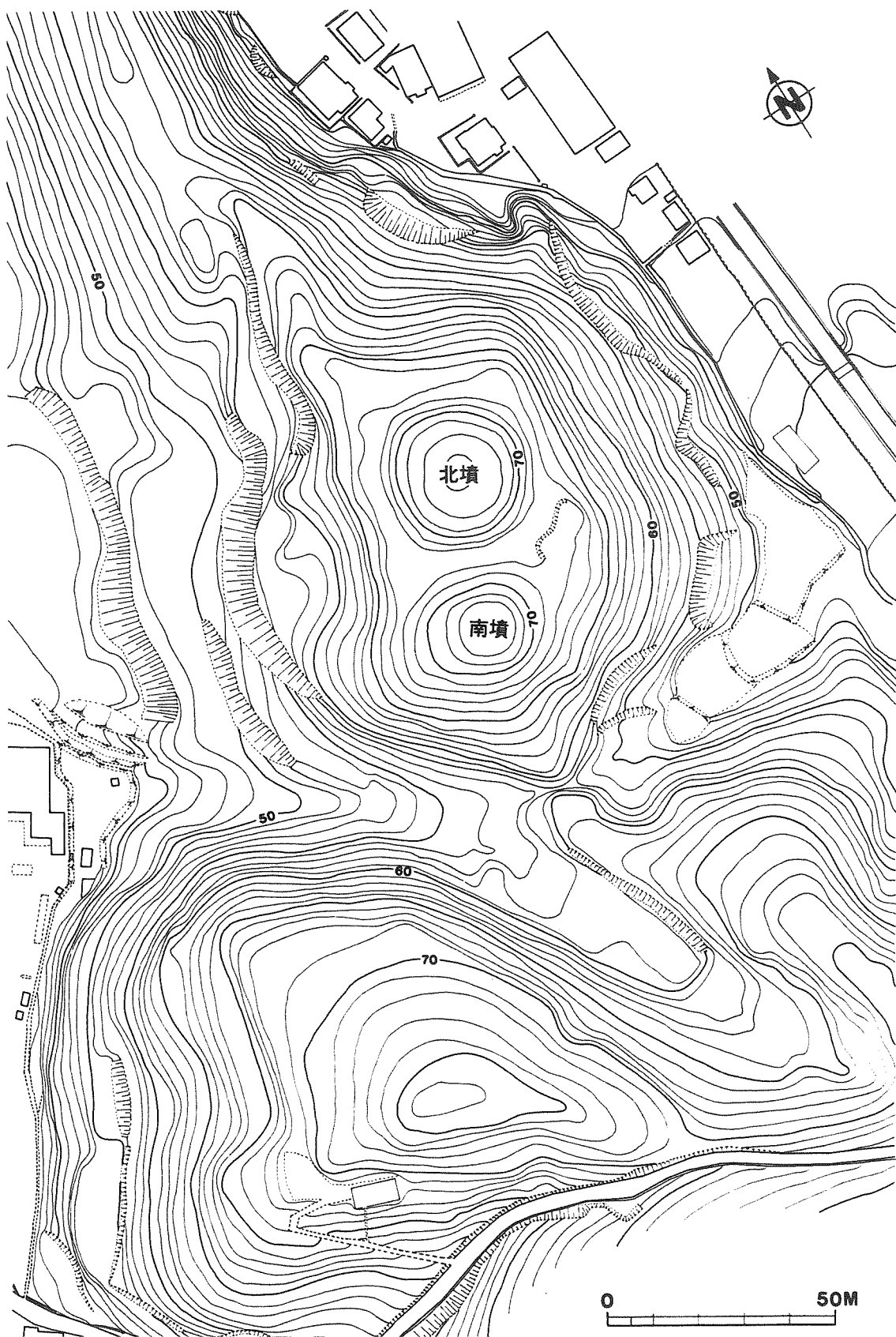


図 13 採土前の地形図

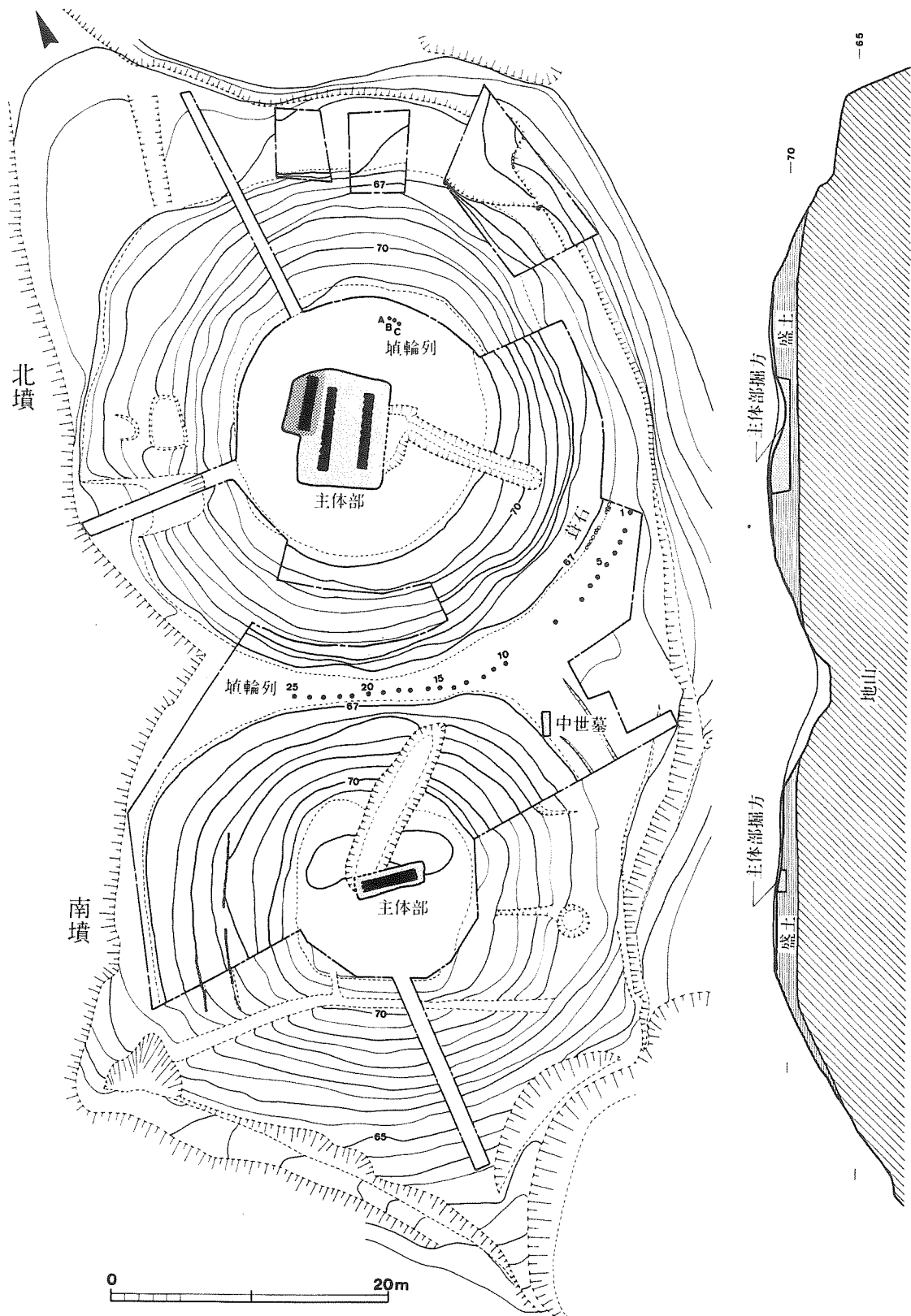


図 14 遺構配置図

墳頂下 1.3m 地点で検出された。中央部を大きく攪乱されているが両端木口が遺存しており、形状から長さ 557cm、南木口幅 62cm の割竹形木棺を粘土で被覆した粘土槨であることが分かっている。副葬品は南木口棺外に約 90 点の鉄製農工具類がまとめておかれていた。

中央槨は墳丘中心にやや西に位置するもので、墳頂下 0.7m 地点で検出された。中央部から北を大きく攪乱されており規模確定ができない。木棺は南木口幅 60cm の割竹形木棺の直葬である。木棺全長は 5.5m ほどに推定できる。副葬品は棺内南木口寄りに 110 点ほどの鉄製農工具・鉄鏃が置かれていた。

西槨は墳丘中心西寄りに位置するもので、墳頂下 1.7m 地点で検出された。攪乱はされていない。棺は北端木口幅 73cm、南端木口幅 66cm、長さ 383cm の割竹形木棺であり、これを粘土で被覆した粘土槨である。副葬品は棺上に漆楯、棺内南側に長方板革綴短甲と頸甲・肩甲が組み合わされ中に三角板甲革綴衝角付冑が入れられ、その南に鉄柄付手斧を含む鉄製農工具・刀剣・鉄鏃等が 40 点ほどまとめておかれていた。棺中央部両側に刀剣、頭部側の北木口に仿製半円方形帯神獸鏡 1 面・玉類・漆塗豎槨が置かれていた。棺外にも刀剣・矛がおかれていた。

北墳の築造年代は、副葬品と埴輪の形式から考えて、古墳時代中期初頭から前葉に比定できる。

## 南墳

南墳は直径 34m、高さ 4.3m

を測る。段築・葺石は確認されていない。昭和 43 年の調査段階では、円墳か方墳かは確定していない。

埋葬施設は墳丘中心直下で東西軸の主体部が 1 基検出されている。棺は箱形木棺で、全長 418cm、東端幅 80cm を測る。西端は部分的に攪乱されており不明。

副葬品は、棺上に漆楯、棺内は足元となる西側に横矧板鋳留短甲と頸甲・肩甲が組み合わせられ中に横矧板鋳留綴衝角付冑と冑甲が入れられていた。その横に籠手、さらに西側に胡籙に入れられた鉄鏃の束が 3 組 120 本置かれていた。棺内中央は両側に直刀と剣が置かれ、西側寄りに有機質小箱に入った仿製四葉文鏡と多数の白玉及び刀子、東側の頭部付近に玉類、東端に横矧板三角板併用鋳留短甲と頸甲・小札肩甲が組み合わせられ中に三環鈴が入れられていた。その周囲には革草摺と馬具が置かれ、棺外の東端には馬具類、両側に矛が置かれていた。

南墳の築造年代は、副葬品の形式から考えて、古墳時代中期中葉から後葉に比定できる。

## 2 節 測量調査

### 地形・墳丘（昭和 43 年）

二子山古墳は南の仏徳山から北にのびる丘陵の尾根上に築かれた 2 基の南北に並んだ古墳である。北側のものを北墳、南側に位置するものを南墳としている。

それぞれの墳形・墳丘について、昭和42年の調査で分かったことを述べる。

#### (1) 北墳

北墳は直径40mで、高さ4.3mの円墳である。標高は墳頂部分で約70mの高さで、墳丘は丘陵の地山を削り出し、その上に2.0m～2.5mの盛り土をして築造したことを確認した。墳丘裾より1.8m上に地形変換点があり、これを段築であるとした。また、墳丘裾の南側で葺石を一部確認した。

墳丘裾より外の平坦部分では、円筒埴輪が環状に巡ることを一部で確認したが、南側では南墳築造前の自然地形に圧迫されて直線的になっていた。

#### (2) 南墳

南墳の墳形は、円墳と方墳の二案があったが、これを確定しなかった。円墳ならば直径34m、方墳ならば南北28m、東西34mの高さ4.3m。無段築の円或いは方墳であるとした。標高は墳頂部分が約71mの高さ。墳丘は北墳築造時の残丘である丘陵南側の地山を削り出し、その上に1.7mの盛り土を施して築造していた。また、墳丘南側裾部はかなり下まで盛り土を施していた。

墳丘裾東側で環状に巡る溝を確認していて、これを昭和42年当時は濠であるとしたが、埋土から磁器が出土しているため、後に濠とすることを疑問視されている。溝の付近では中世墓も確認された。

### 測量成果 推定される墳形等

平成28年度～29年度の試掘調査に伴って測量調査を実施した。その結果、土取りによる攪乱が一部墳丘裾に及んでいることが分かった。昭和43年の調査を行うきっかけになった、土取り痕が北墳南墳の墳丘裾西側から南側に及んでいる外、南墳の南西側や南東側は墳丘を一部削るような地形の改変を受けていた。

#### (1) 北墳

墳形は円墳である。直径は約40m、高さは約5mで墳頂部の標高が約71mである。

墳頂部は元々平坦であったところに、盗掘の痕跡が残っていて中心が窪んでいた。墳丘に地形変換点は見られず、段築は測量調査では認められなかった。北西側の墳丘裾より北側に地形が平坦になる部分があり、これが造り出しである可能性を考え、後にトレンチを設定することになった。

#### (2) 南墳

南北長30m、東西長34mの円、或いは方墳である。昭和43年の調査では墳形は確定しなかったが、今回の測量調査でも判断できなかった。高さは約4.2mで、墳頂部の標高は約70mである。墳頂から墳丘北側裾にかけては盗掘の痕があり、溝状の窪みが残っている。傾斜変換点は見とれず、段築の有無や位置を測量調査から見つけることはできなかった。北墳と接する北側以外の墳丘裾部付近は、土取りの影響を受けており、墳形を判断できない一因になっている。

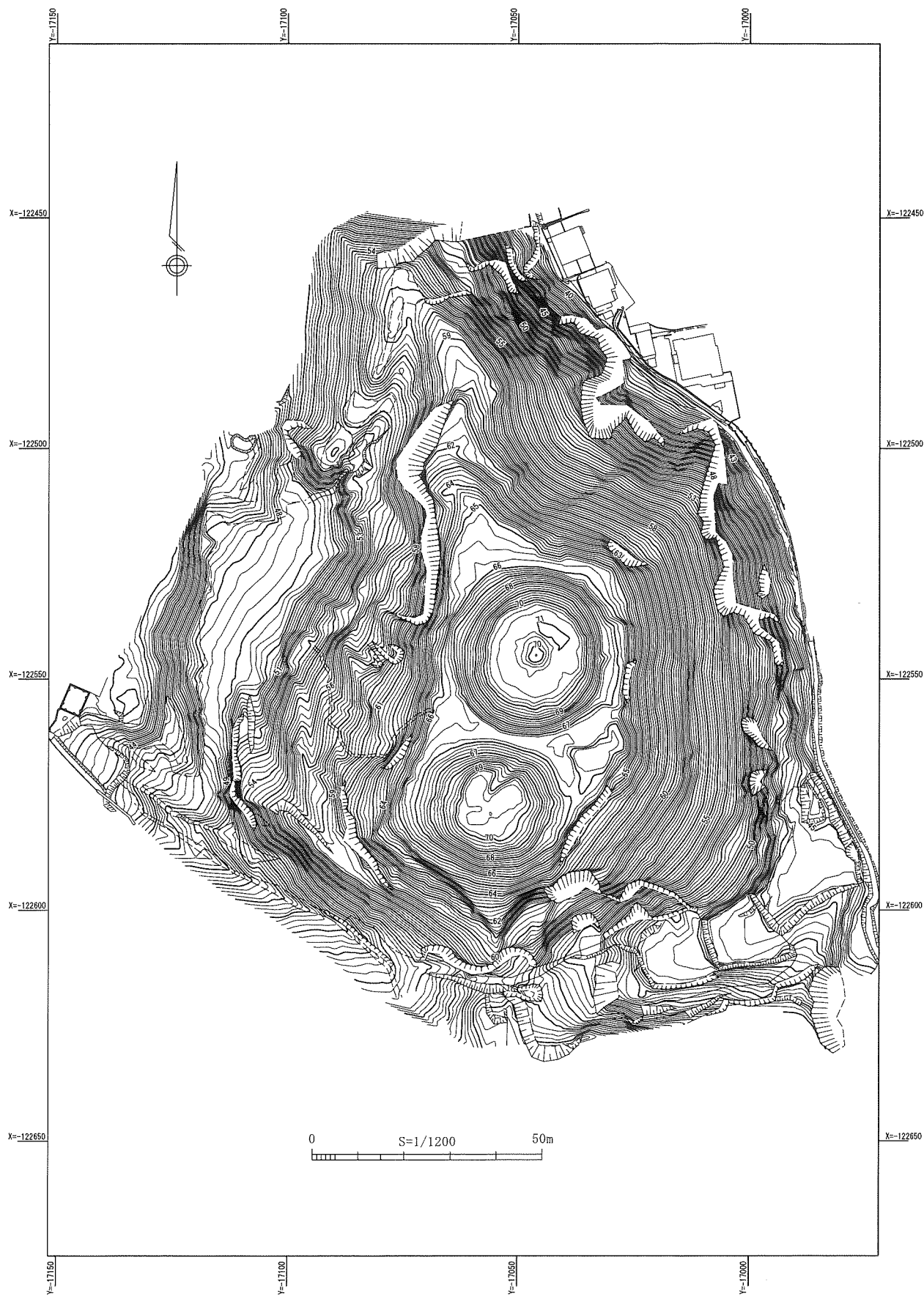


图 15 测量图

### 3 節 二子山古墳南墳の発掘調査

#### 調査の目的と調査区の配置

二子山古墳南墳の発掘調査は、古墳の内容および範囲の確認、古墳保存の検討のため実施された。調査は墳丘の形が不明確な南墳の墳形を確認する目的で、南墳の墳丘裾 4 カ所に調査区を設定した。北東部、北西部、南西部、南東部それぞれの調査区は 1 調査区から 4 調査区とする。詳細については遺構編にて記述する。

#### 第 1 調査区調査成果

調査区は墳丘北東部の墳丘裾とみられる傾斜変換点に設けた。調査区の規模は南北 7m、東西 4.7m で、調査区の長軸を北から東に 24.5° ふる。(1 トレ平面図)

本調査区の基本的な層序は、上から灰黄褐色土 (1 層上面)・黄褐色土 (1 層下面・2・3・6 層) が堆積し、その下の墳丘裾あたりに褐色砂質土 (7 層) が堆積し、地山の上に明黄褐色シルト質極細粒砂 (4・8 層) を盛る。地山は礫を比較的多く含む黄褐色シルト質極細粒砂である。灰黄褐色土および黄褐色土 (1・2・3・6 層) には中～近世の土師皿片や青磁・白磁・国産陶磁器が含まれることから、中世後半ごろから近世にかけての墳丘流土と考えられる。褐色砂質土 (7 層) は上層とよく似た土質でありながら中近世の遺物を含まず埴輪片や須恵器片を含んでいることから、早期の墳丘流土と考えられ、旧表土を形成していたとみられる。4 層は上層の 2 層とよく似た土質であるので墳丘流土とも考えられるが、埴輪片を含まないために墳丘盛土の可能性もある。明黄褐色シルト質極細粒砂 (8 層) は地山上に厚く堆積した目の細かい層であるが、埴輪片を含まないため墳丘裾を形成する盛土と考えられる。(1 トレ「南壁断割」図)

遺構は表土直下で旧トレンチとみられる SD4 と SD5 を検出した。SD4 は長辺 200cm 短辺 95cm 深さ 100cm の長方形を呈する土坑であり、埋土は層を成さず、遺構底部から現代の陶器やプラスチック容器を検出したことから旧調査区と判断した。SD5 は長辺 200cm 短辺 50cm 深さ 25cm の浅い溝状遺構である。SD5 もまた図面上の位置関係の一致や埋土の様子から旧調査区とみられる。この旧調査区の延長線が 3 トレンチで検出した旧調査区と合致するため、墳丘を横切るように設定された旧調査区の一部と判断した。旧表土以下では遺構は検出されなかった。

墳丘裾の傾斜変換点が設けられたと予想される地点に旧トレンチがかかった関係で、裾の造成状態を確認する目的で裾部の掘削を行った。アゼの堆積状況を確認すると、墳頂側に挟まれる形で存在する地山の東側に盛り土を施している状況が確認できた。黄褐色砂質細粒砂 (1 層) が薄く堆積する下は明黄褐色シルト質細粒砂 (2・4・6・7・8 層) と黄褐色シルト質細粒砂 (3・5 層) の互層になっており、いずれの層も地山の灰白色シルトブロックを含む。とくに 2 層は地山ブロックを比較的多く含んだ土であり、このような様相は 2 トレンチ墳頂部に施された盛り土と一致する。(1 トレ「南側アゼ」図)

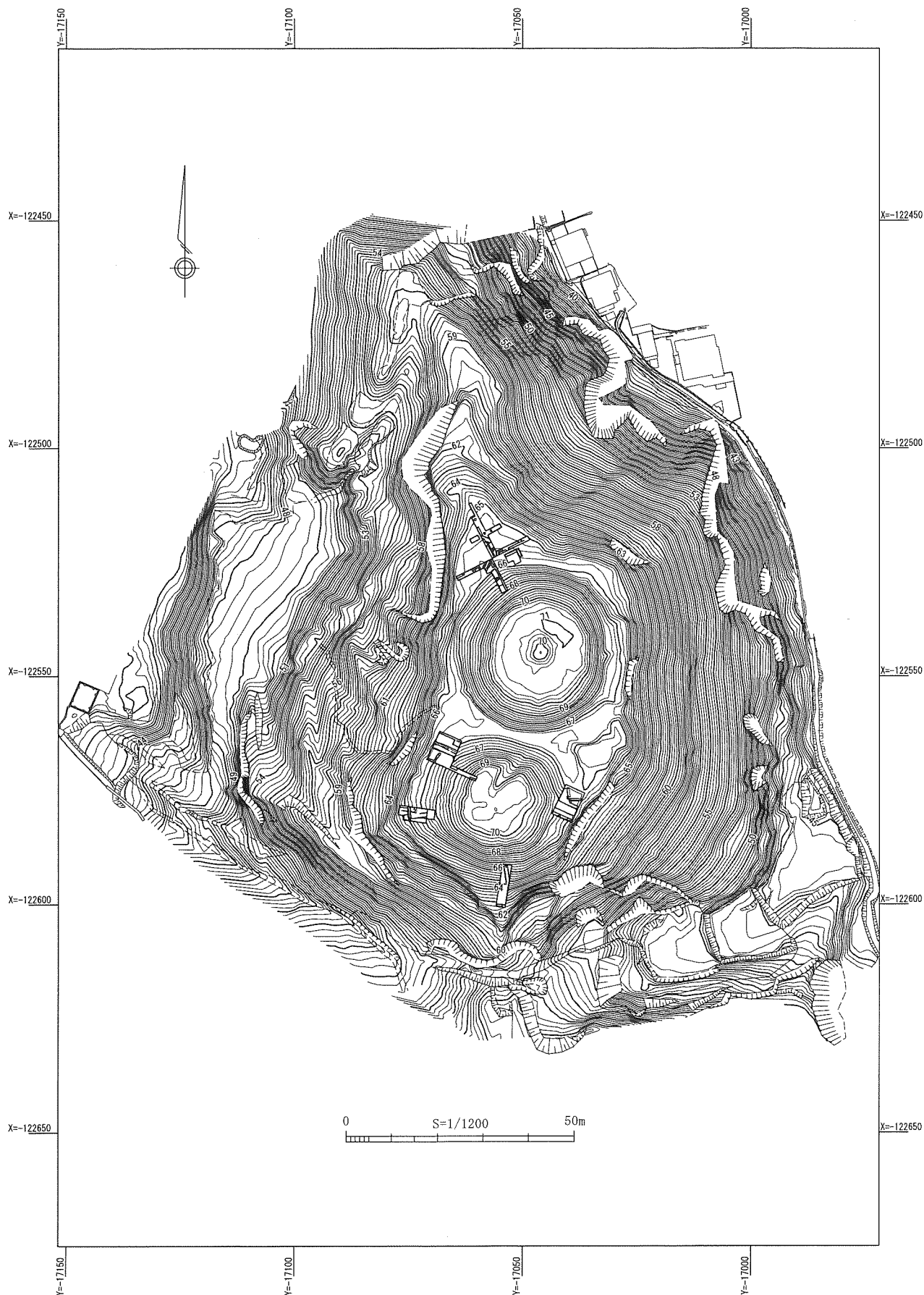


図 16 調査区配置図

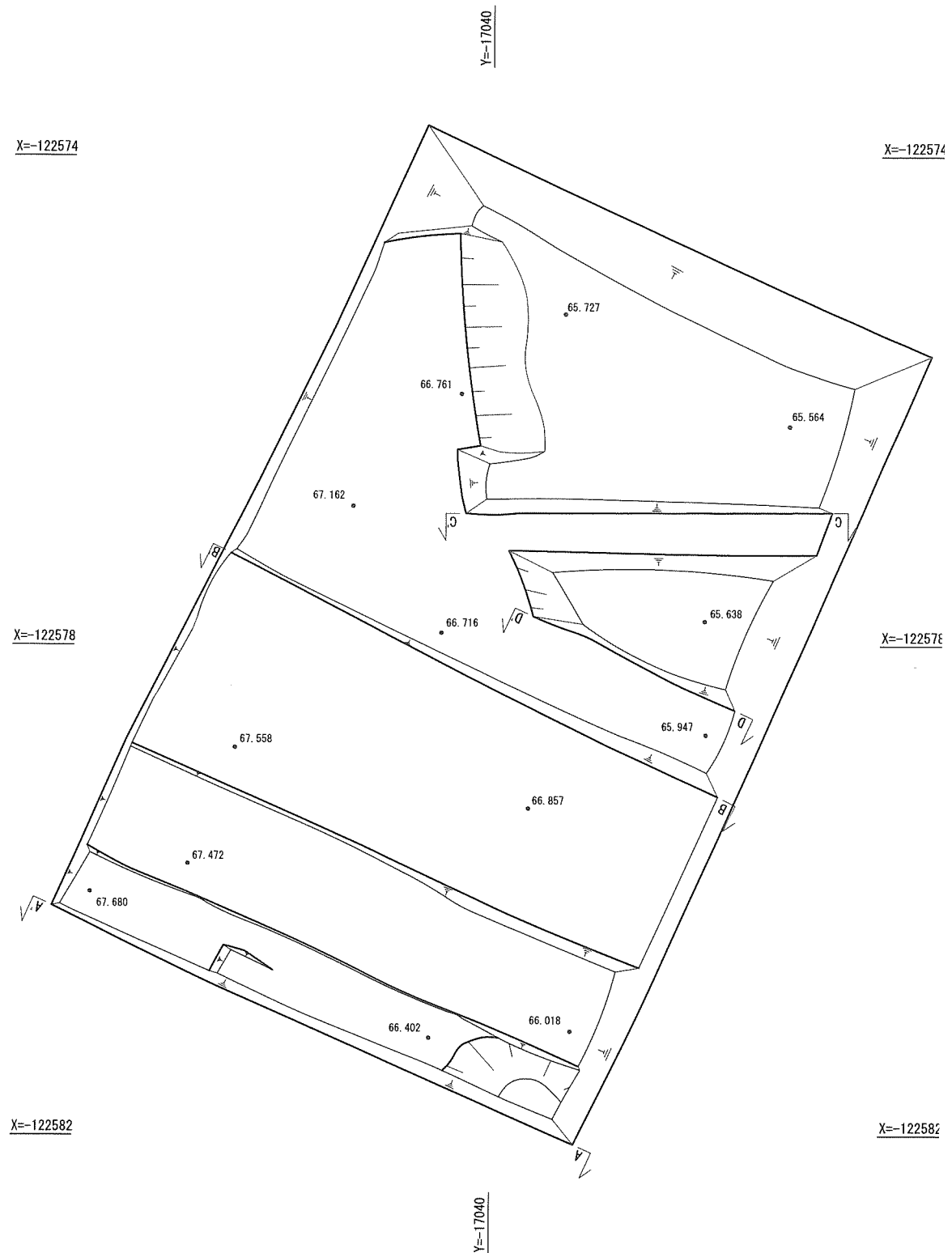
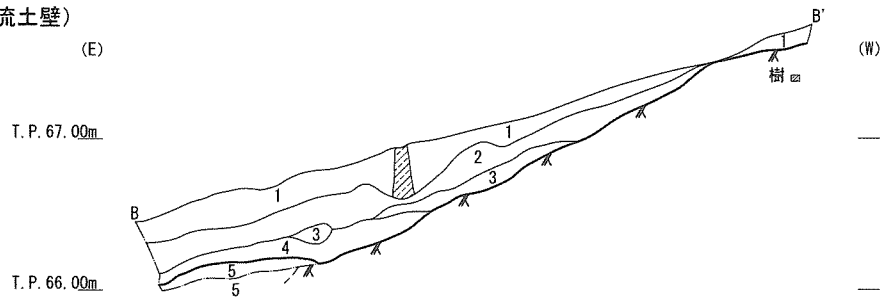
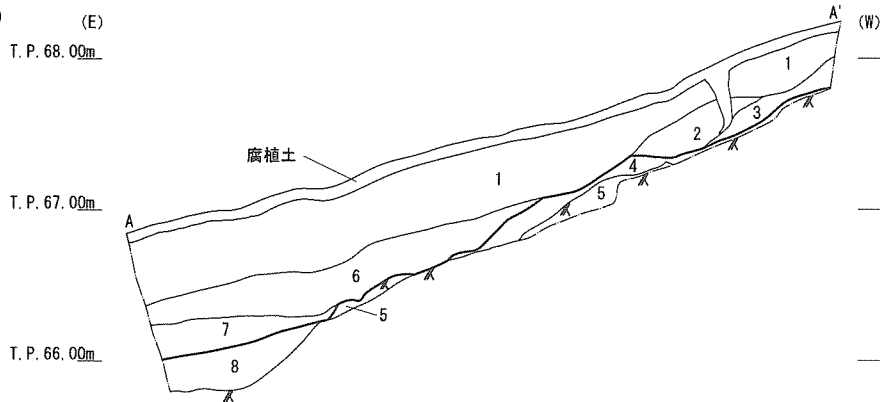


図 17 第 1 調査区平面図

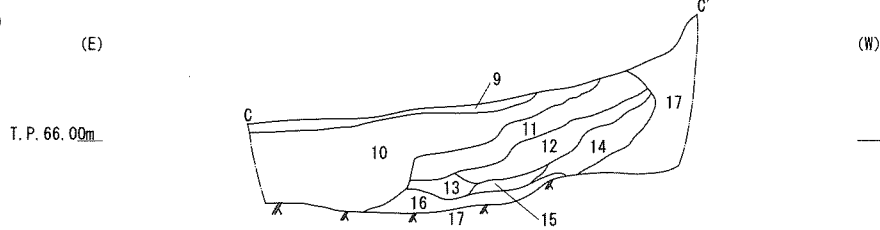
(中央墳丘流土壁)



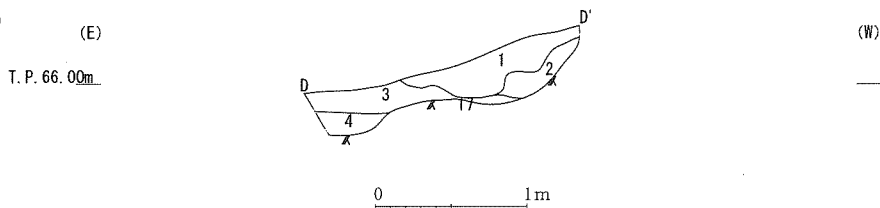
(南壁断割)



(南側アゼ)



(裾盛土壁)



- 1 10YR6/6 明黄褐色中粒砂 (φ1~3cm程の礫を多く含む) 《墳丘流土》
- 2 10YR6/6 明黄褐色細粒砂 (φ2~4cm程の礫を含む、土師器片を含む) 《墳丘流土》
- 3 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト質細粒砂 (φ2cm程の礫を少し含む) 《墳丘流土》
- 4 10YR6/8 明黄褐色シルト質極細粒砂 (φ2cm程の礫を僅かに含む) 《墳丘流土、埴輪片を含まないため盛土の可能性有り》
- 5 10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 (φ2cm程の礫を含む、φ5cm程の礫を含む) 《地山》
- 6 10YR5/6 黄褐色シルト質細粒砂 (φ2~4cm程の礫を多く含む、埴輪片を含む) 《墳丘流土》
- 7 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (φ5mm以下の礫を多く含む、φ5cm程の礫を僅かに含む、埴輪片を含む) 《墳丘流土、旧表土か》
- 8 10YR7/6 明黄褐色シルト質極細粒砂 (φ3cm程の礫を僅かに含む) 《盛土、埴輪片を含まないため》
- 9 10YR5/6 黄褐色砂質細粒砂 (φ5mm程の礫を多く含む、φ2~5cmの礫を少し含む) 《盛土》
- 10 10YR6/6 明黄褐色シルト質極細粒砂 (5Y7/2 灰白色砂質細粒砂、5Y7/2 灰白色シルト質極細粒砂、φ5~10cm程の地山ブロックを斑に多く含む、φ2~5cmの礫をやや多く含む) 《盛土》
- 11 10YR5/6 黄褐色シルト質細粒砂 (φ5mm程の礫を含む、φ2cm程の礫をわずかに含む、炭化片を含む) 《盛土》
- 12 10YR6/6 明黄褐色シルト質細粒砂 (φ5mm~2cm程の礫をやや多く含む、5Y7/2 灰白色砂質細粒砂のφ2~3cm程の地山ブロックを斑に含む) 《盛土》
- 13 10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 (φ1~2cm程の礫を少し含む、5Y7/2 灰白色砂質細粒砂を僅かに斑に含む) 《盛土》 32
- 14 10YR6/6 明黄褐色シルト質細粒砂 (φ1cm程の礫を僅かに含む) 《盛土》
- 15 10YR6/6 明黄褐色シルト質極細粒砂 (φ3mm~1cm程の礫を僅かに含む) 《盛土》
- 16 10YR7/6 明黄褐色シルト質細粒砂 (5Y7/2 灰白色シルト質細粒砂のφ5cm程の地山ブロックを斑に含む、φ5mm程の礫を含む) 《盛土》
- 17 10YR7/6 明黄褐色砂質細粒砂 (5Y7/2 灰白色砂質極細粒砂との互層) 《地山、花崗岩パイラン》

図 18 第 1 調査区土層断面図

南墳北東側の裾部では墳丘造成前に地山が崩れ落ちていたなどの原因のために、盛り土を施して裾を形成したものと考えられる。裾より上部では地山の形状が墳丘を形成しているが、盛り土部分ではほぼ地形が平坦になることから、地山と盛り土の境である標高 66m 付近で墳丘裾の傾斜変換点が形成されたと考えられる。

## 第2 調査区調査成果

調査区は墳丘北西部の墳丘裾とみられる傾斜変換点に設けた。調査区の規模は南北 6.8m、東西 5.3m で、調査区の長軸を北から東に 24° ふる。さらに墳頂部の様子を確認する目的で調査区南辺を 1m 幅で墳頂に向かって 6.3m 延長した。

本調査区の基本的な層序は灰黄褐色土（1・13 層）が堆積し、墳頂付近では表土の下に旧調査時の掘削土とみられる明褐色砂質土（14 層）および旧表土と考えられる黒褐色砂質土（11 層）が堆積する。その下は黄褐色土（9・2・14・15 層）が堆積し、墳丘上部では地山の直上にのる。裾部では何度かに分けて流土が堆積したとみられる。褐色砂質土（16 層）は埴輪片や鉄片を含み、その下の橙斑土（17・18 層）も同様に埴輪片や鉄片を含んでいる。19 層は 17 層直上で溝状の浅い落ち込みとして検出したが、埋土に埴輪片や須恵器片を含むことから、自然に形成された溝状の落ち込みに墳丘流土が流れ込んだものと考えられる。20 層は遺物を含まない精良な土質であることから墳丘裾部の形状を整える盛土である可能性が考えられる。墳頂部では 2 層の下に明褐色砂質細粒砂（10 層）が堆積する。盛り土とも考えられるが、しまりのない土質のため墳丘流土の可能性はある。墳頂部の表土直下に地山ブロックを少量含む明黄褐色砂質細粒砂（3・5・7 層）と同様に地山ブロックを含んだ赤褐色砂質細粒砂（4・6 層）が互層となっている。この下にさらに地山ブロックを少量含む黄褐色砂質細粒砂（8 層）、黄褐色シルト質細粒砂（12 層）を盛り、地山上にしまりのない黄褐色シルト質土（13 層）がのる。

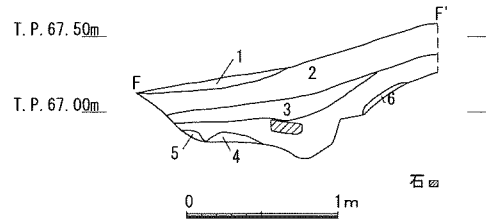
遺構は表土直下および地山直上で検出した。表土を取り除いたところで石列遺構 SX1 および SX2 を検出し、墳頂に向かって延長した部分では SX3 を検出した。SX3 は一部石列の上部が表土上に表出していた。黄褐色土を掘り下げると東西方向に直線的に並ぶ SX2 および南北方向に並ぶ SX3 は地山を掘りこんで石を据えていることが明らかになった。SX2 は長辺 30cm 大の石を幅 70cm 程に並べており、調査区東辺から 2.2m 付近までは原位置を保っていると考えられる。（2 トレ「SX02 平・立面図」）それぞれの石列付近の黄褐色土中から寛永通宝が数点検出されており、近世に構築された建物の基礎ではないかと推測する。

1 トレンチで確認した墳丘北東部と同様に、地山の形状が墳丘を形成している。褐色砂質土直下で、当初 SX4 とした浅い溝状の落ち込みを検出しており、この溝を境として傾斜変換が認められ、緩やかな弧を描く様子が見出された。傾斜変換の続きを確認するために調査区の北東角 1.5m 四方の黄褐色土を取り除いたところ、円弧の延長に傾斜変換が見出された。墳丘裾の位置は標高 66m であり、墳形が円墳であることを確認した。

(2トレンチ東壁土層図)

(N)

(S)



- 1 7.5YR5/6 明褐色細粒砂
- 2 7.5YR5/8 明褐色細粒砂 (φ2~5cm程の礫が混じる)
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色中粒砂 (φ1~3cm程の礫が混じる)
- 4 10YR2/2 黒褐色極細粒砂 (φ2~4cm程の礫が混じる、φ20cm程の礫有り)
- 5 10YR5/6 黄褐色中粒砂 (φ3cm程の礫が混じる)
- 6 10YR6/4 にぶい黄橙色細粒砂

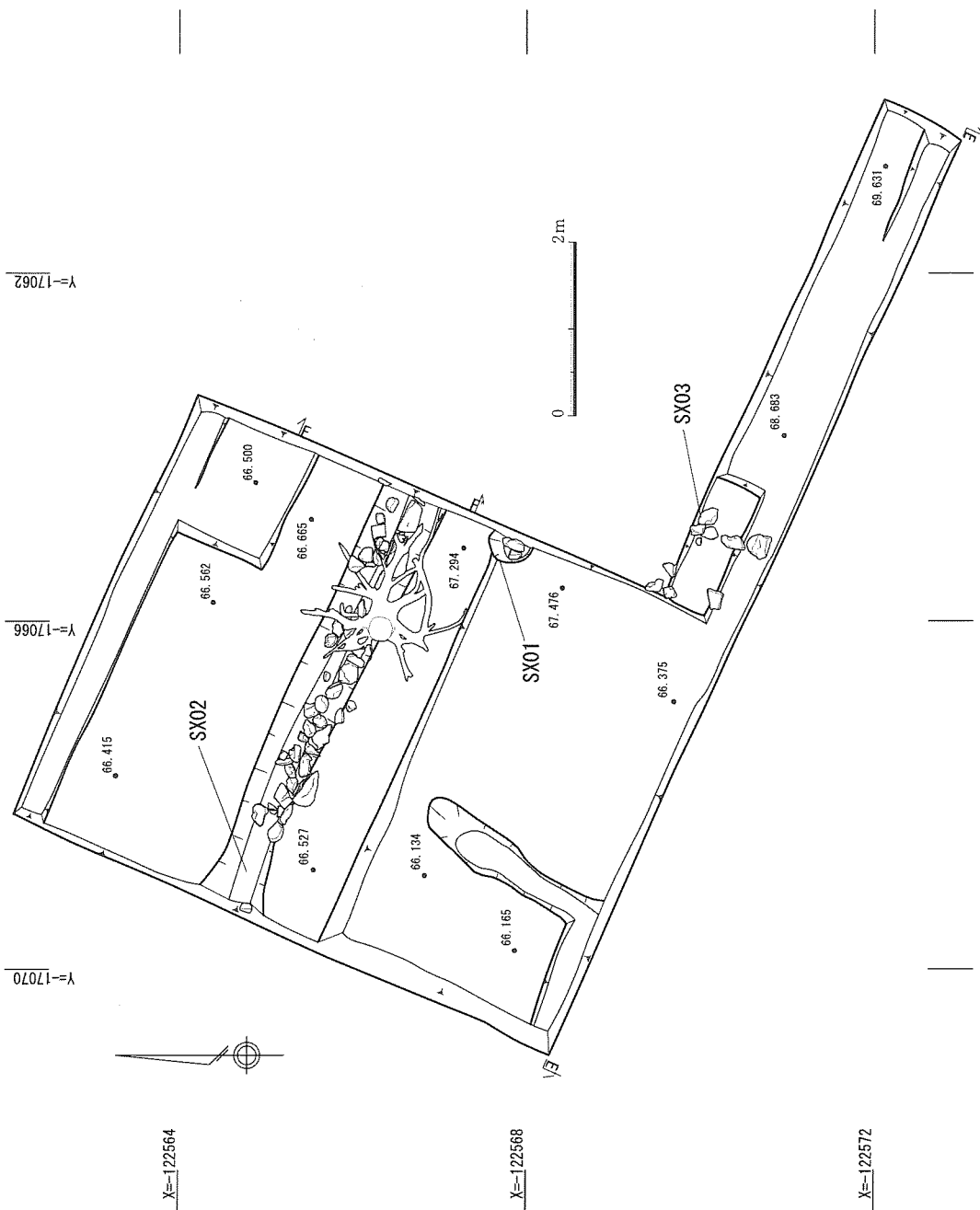


図 19 第2調査区平面図及び東壁土層断面図

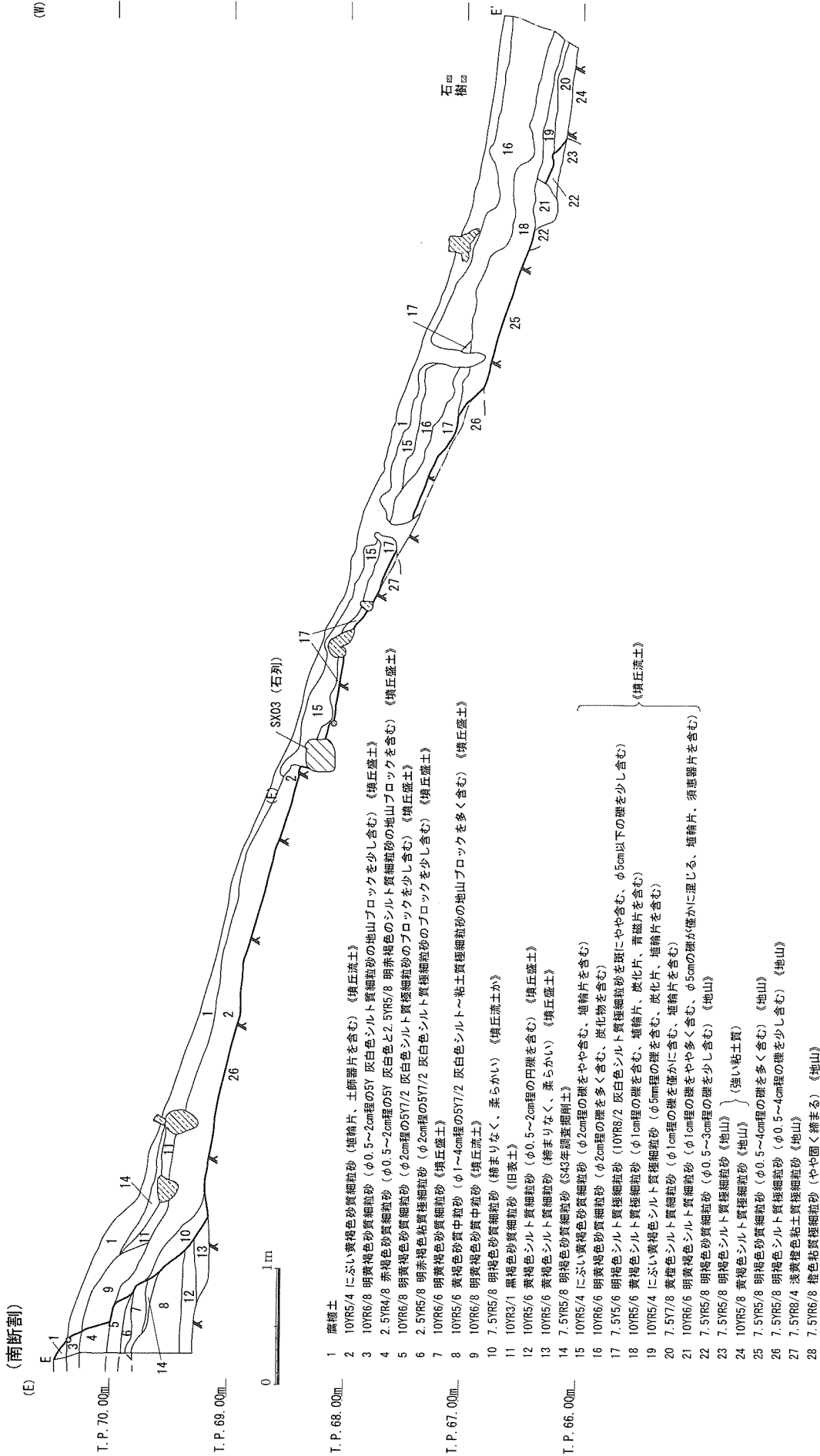
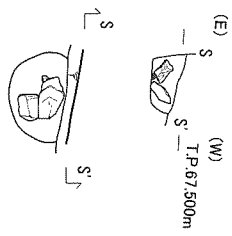
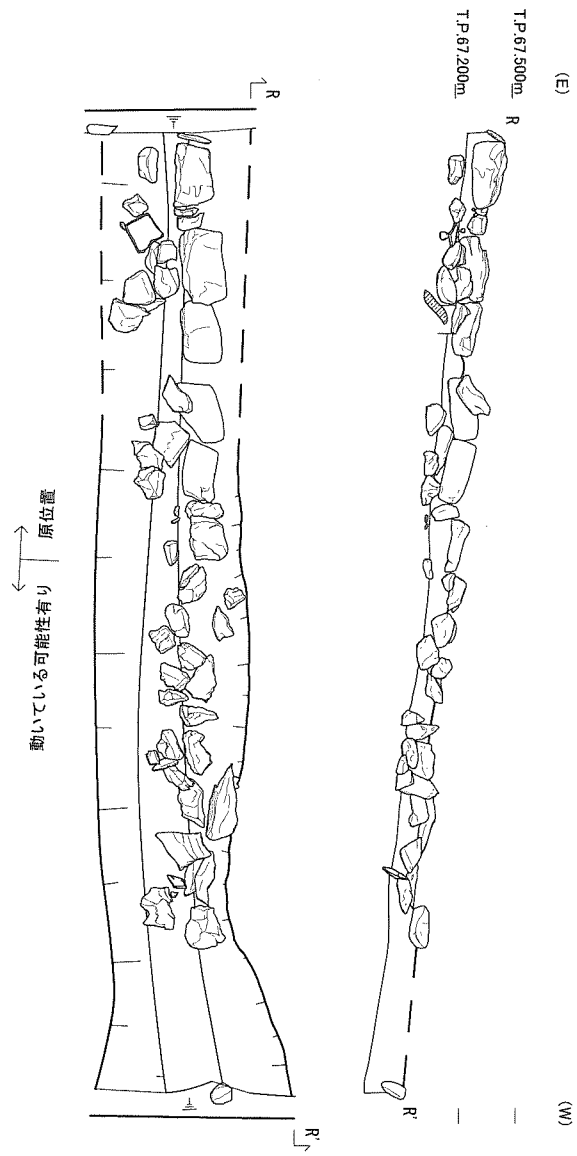


図 20 第2調査区南断割土層断面図

(第2調査区 SX01)



(第2調査区 SX02)



(第3調査区 SX01)

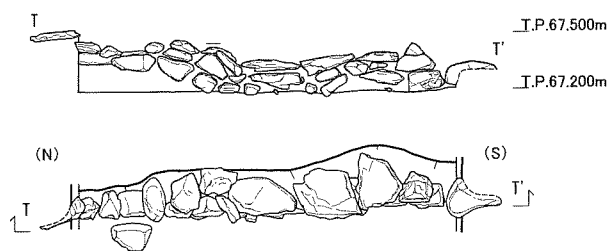


図 21 第 2・3 調査区検出遺構平面図及び立面図

また、墳頂部の盛土（3～8・12・13層）を確認した。裾部にかけての流土の厚さから判断すると原型を留めてはいないと考えられるが、地山ブロックの入る様相は1トレンチの墳丘裾の盛り土と一致しており、人為的に造成された層であると判断した。

（大平）

### 第3 調査区調査成果

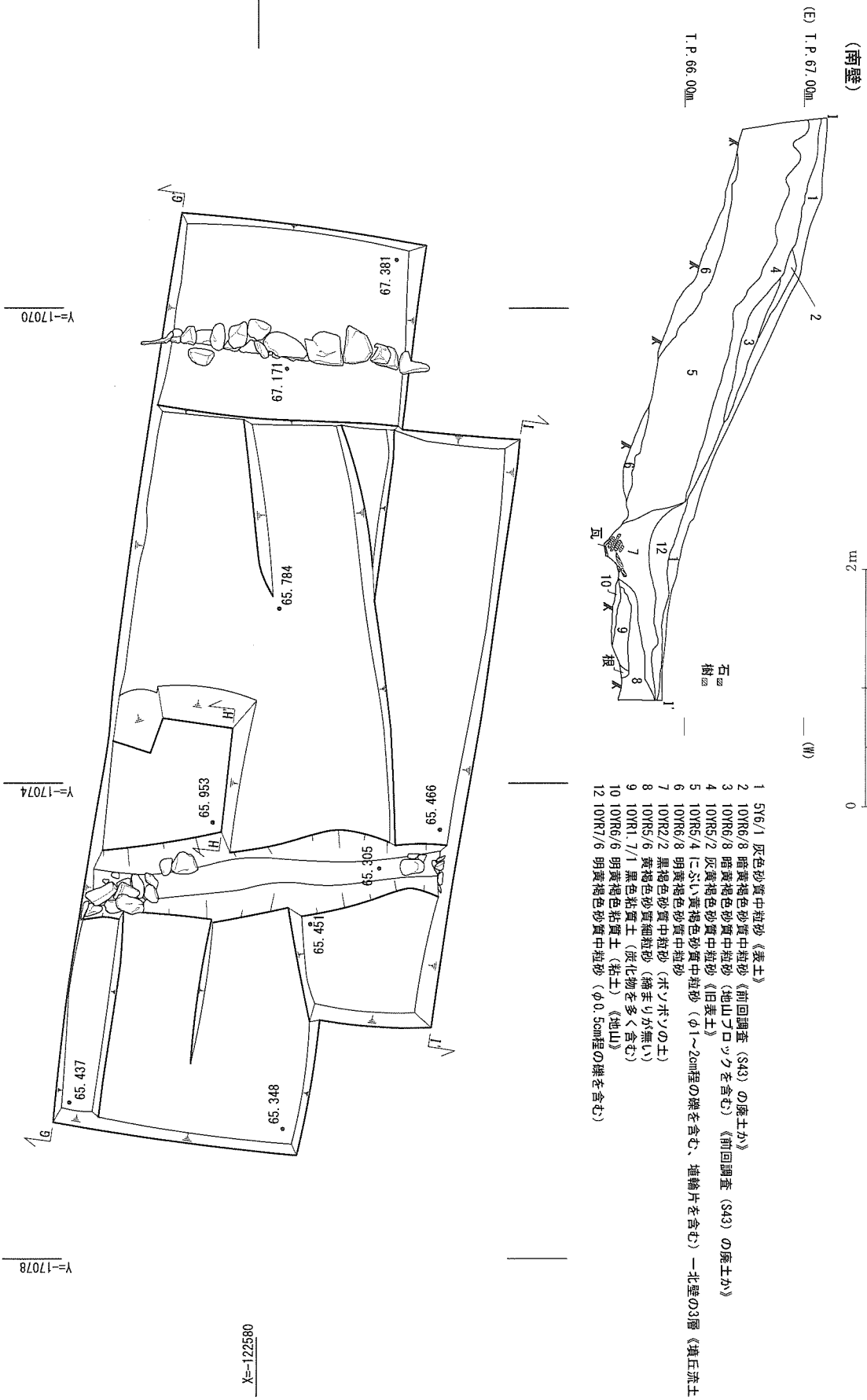
調査区は墳丘の南西裾の位置と形状を確認する目的で、墳丘南西部の墳丘裾とみられる傾斜変換点に設けた。調査区の規模は南北3m、東西7mで調査区の長軸を北から西に82°ふる。

基本層序は表土（第1層）、にぶい黄褐色砂質中粒砂層（第2層）、黄褐色中粒砂層（第3層）、黄褐色砂質中粒砂層（第6層）、明黄褐色砂質中粒砂層（第7層）、明褐色中粒砂層（第8層）、黄褐色砂質中粒砂層（第9、10層）、橙色粘質シルト層（第11層）、明黄褐色砂質中粒砂層（第12、13層）、黄橙色砂質中粒砂層（第14層）、黄褐色砂質中粒砂層（第15層）、にぶい黄褐色粘質細粒砂層（第18層）である。第2～3層は前回の調査における廃土、第4層は旧表土であるとおもわれる。第6、7、10～15層と第16～20層では直径1～3cm程度の礫を含む層が多い。第6、7、10～15層からは埴輪片が多く出土しているのに対し、第16～20層では出土していないことから、前者は古墳築造後に堆積した墳丘流土の層、後者が墳丘の盛土であるとおもわれる。第16～20層では、第18、19層のみが地山ブロックを含んでおり、地山ブロックを含む層と含まない層で互層となっている様子が確認された。第25層は地山風化土であるとおもわれる。

遺構は表土を取り除いた第6層上面と第22、23層を取り除いた地山直上で検出した。第6層上面では、南北に走る石列SX01を検出した。長軸200cm、短軸35cm、深さ30cmの範囲に、20～30cm程の石が2～3段積み上げられており、さらに南北に続くものとみられる。石列の背後に沿って第8層（にぶい黄褐色砂質中粒砂層）がある。この層は、外が固く締まり、内が柔らかいという特徴をもち、石列を設置する際の掘り込みの埋土とみられる。さらに西側の地山直上では同様に南北に走る石列SX03を検出した。範囲は長軸200cm、短軸80cm、深さ55cmで、上面の第21～23層は墳丘流土とは異なる土であることから、遺構として検出はしていないが、石列設置後に設けられた掘り込みの埋土とおもわれる。南壁付近の第23層の下層で、近世以降の瓦溜まりが確認されたことから、石列は近世のものとみられ、SX01、02ともに時期、性格は第2調査区で検出された石列と同様と考えられる。また、トレンチの北東から南西を横切るようにSD02が検出された。昭和43年の調査でのトレンチとみられ、その埋土からは突帯部を含む埴輪片、斜格子文をもちタタキ痕がみとめられる平瓦が出土した。

東壁から約5m、標高65.643m付近より西側では、墳丘盛土が確認されず、墳丘斜面も緩やかになることから、この付近が墳丘裾であると考えられる。盛土の範囲は標高65.643mより上で、成形された地山上に、黄褐色砂質中粒砂（第20層）、黄橙色砂質中粒砂（第19層）、地山ブ

図 22 第3調査区平面図及び東壁土層断面図



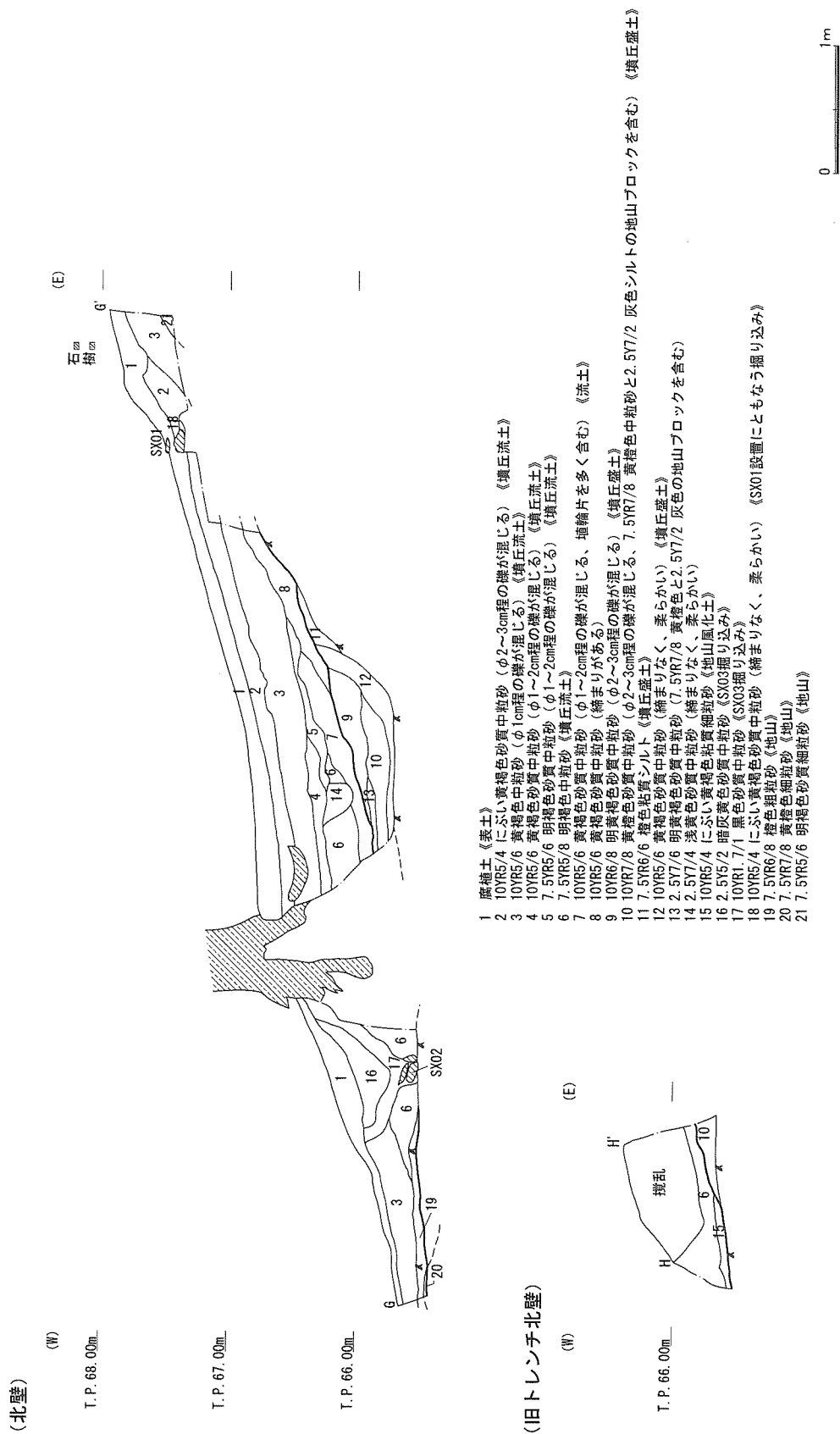


図 23 第3調査区土層断面図

ロック土の混じる明黄褐色砂質中粒砂（第18層）、明黄褐色砂質中粒砂（第17層）、橙色粘質シルト（第16層）を盛る。いずれも締まりがなく柔らかい層であり、北壁第18・19層には地山のブロック土が含まれるが、他の層には含まれず、ブロック土を含む層と含まない層の互層となっている。

（岡田）

#### 第4調査区調査成果

調査区は墳丘南裾の位置と形状を確認する目的で墳丘南部に突き出た斜面上に設定した。規模は南北9.4m、東西2mであり、調査区の長軸を北から東に9°ふる。

本調査区の基本的な層序は、上から明黄褐色細粒砂の堆積土（1層）、にぶい黄褐色極細粒砂の堆積土（2層）、黄褐色中～極細粒砂の墳丘面（3, 4層）、鈍い黄褐色とにぶい黄橙色の互層による盛土面（7～10層）、地山層（11層）となっている。また、旧調査区の層序は、上からおよそ明褐色と黄褐色の互層による盛土面（1～6層）、銘赤褐色中粒砂と灰黄褐色極細砂質シルトの互層による地山層（7層）となっている。

第1層は昭和43年度調査の残土であり、SX01埋土からの流土と考えられる。第2層は墳丘上部からの流土であり、調査区全体に広く堆積し、埴輪片などの遺物は主にこの層から出土している。盛り土もこの調査区全体で確認されたが、これは地山に凹凸が目立つことから古墳造営の際に墳丘の形を整える目的で盛土し、そのまま南側の斜面の表面も整えたものと考えられる。

遺構は第4層を取り除いた3層上面で長さ約400cm、幅約80cmのSX01を検出した。SX01の埋土からは染付や瓦、埴輪の小片がわずかに出土するのみで、土層が単一であった点や昭和43年度調査の調査区と図面上の配置が一致していることから、昭和43年度の旧調査区であると判断した。

また同じ面で墳丘面も検出した。墳丘盛土は基本的に厚さ約2cmの明褐色土と黄褐色土の互層により、砂質土が主体となる。地山の削り出しによって墳丘を形成する北側とは異なり、本調査区の位置する墳丘南側はかなりの範囲に盛土が施されている。昭和43年度調査において存在が指摘されていた墳丘裾だが、今回の調査では明確な傾斜変換点を確認することができなかった。

（陰地）

#### 出土遺物

本調査では、墳丘裾に設定したすべてのトレンチから埴輪片が出土した。器種は円筒・朝顔形埴輪・家形・蓋形・盾形・靱形・甲冑形埴輪がある。出土量はコンテナ15箱分に相当するが、その多くが小片であって表面の摩耗は著しい。このため、器種の判別や個体数の確認、埴輪全

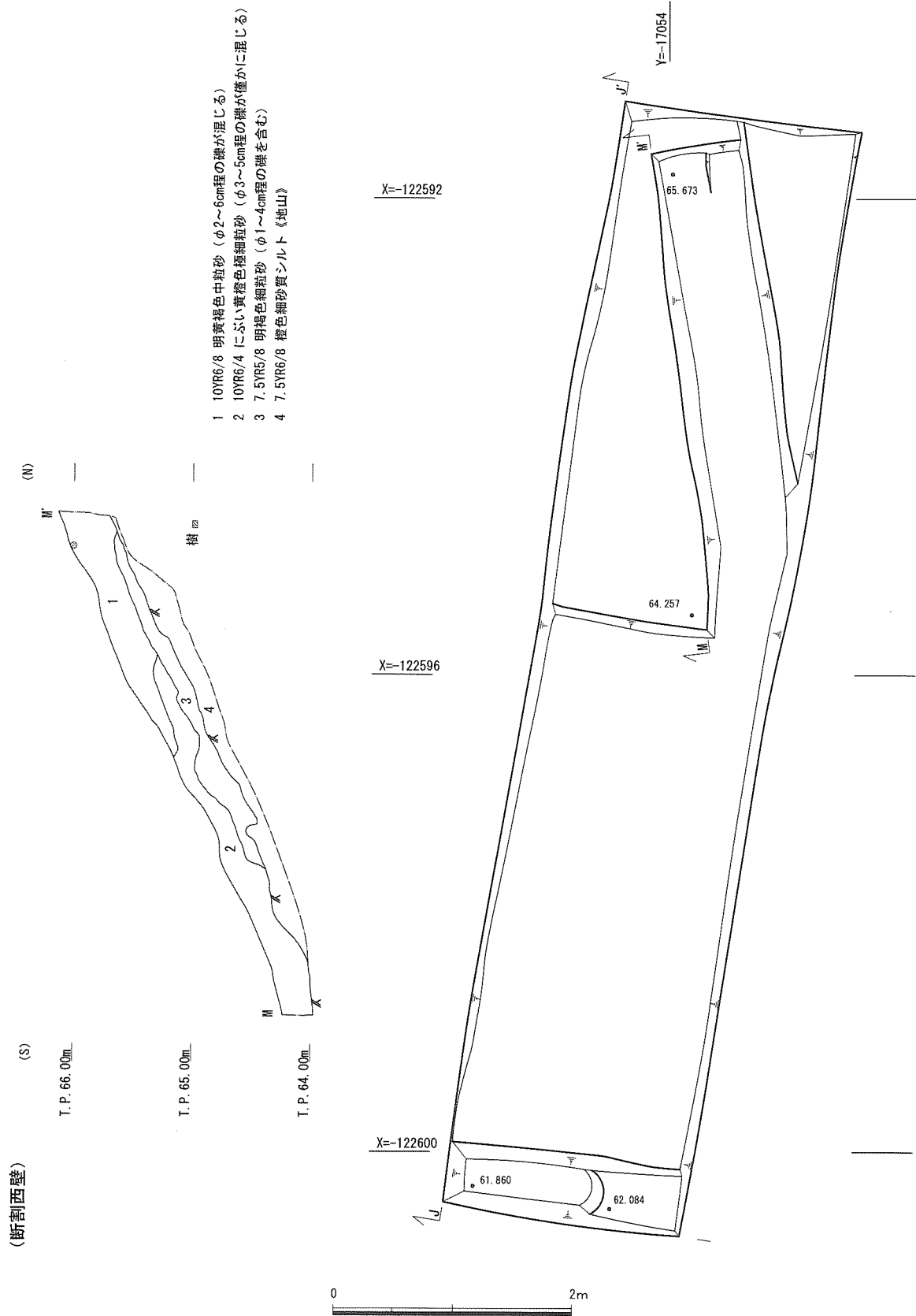


図24 第4調査区平面図及び土層断面図

(西壁)

(S)

T. P. 67. 00m

T. P. 66. 00m

T. P. 65. 00m

T. P. 64. 00m

T. P. 63. 00m

T. P. 62. 00m

(N)

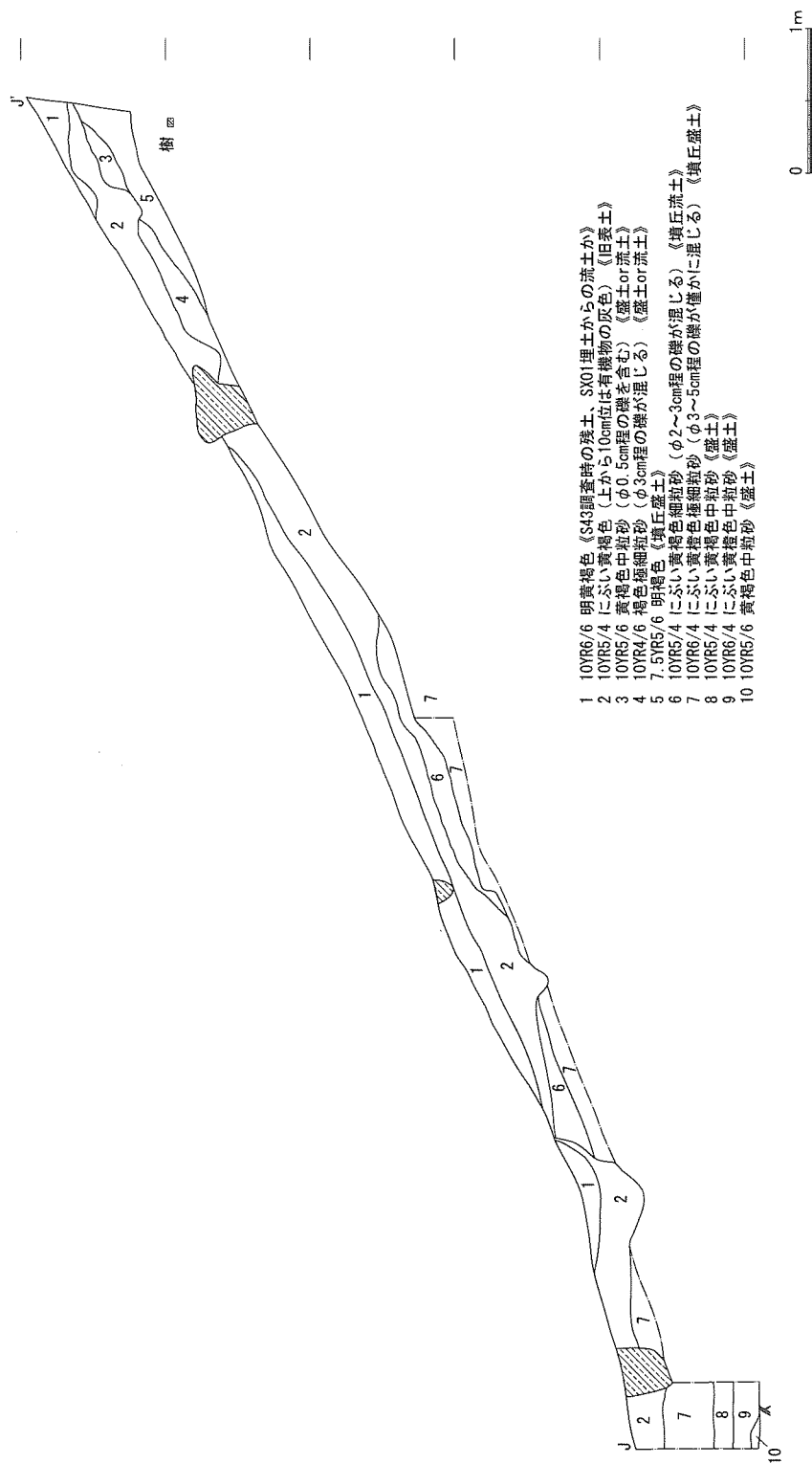


図 25 第4調査区土層断面図

体の復元は容易ではなかった。

### 円筒埴輪（図 28・1～15）

#### （1）概要

以上のように、本調査では多くの形象埴輪が出土したが、円筒埴輪の占める割合はその半数に満たない。円筒埴輪であることが不確定な破片をのぞけば、その割合はさらに低くなると考えられる。また、円筒埴輪片の多くは墳丘裾に堆積する墳丘流土中からまとまって出土したものであり、原位置を留める埴輪は確認できない。そのため形態を復元できる破片はみられなかった。

このような状況のため、円筒埴輪を報告するにあたっては、トレンチや出土位置に拘らずに一括で報告すべきではないかと考えられた。また、円筒埴輪であることに若干の不安の残る破片についても、別器種の可能性であることを補足説明したうえで、合わせて紹介することが望ましいと考えられた。以下ではこのような考えをふまえた報告を行い、より詳細な円筒埴輪の分析を努めることにした。なお、遺物の詳細は観察表にまとめて報告する。

#### （2）形態

口縁部は3種類を確認することができた。1は口縁部を肥厚させるもので、上片と外辺をナデ調整する。2は直立するもので上辺にナデ調整を施す。3は大きく外方にのび外側に面をもち、あるいは朝顔形埴輪かと考えられる。

突帯の断面形態は、3つに分類できる。ただし、図化できたものは8点にとどまる（7～13）。方形を呈示するa類（9）、台形を呈示するb類、各辺がナデにより窪みM字形を呈示するc類があるが、このうちb類は低い台形を呈示するもの（b1類；7・8・10～13）と、上辺が水平にのびて下辺がなだらかに広がり突出度の高いもの（b2類）に細分する。出土した突帯の大半は、b1類に分類できるものであった。

基部は、粘土紐を巻き上げて成形する。14・15の粘土紐の幅は3.2～3.7cmである。このうち、15は最下段の粘土紐の幅が6.8～7.3cmであった。14の底面には藁状の植物によるものと考えられる圧痕が確認できる。14・15はいずれも第1調査区から出土した。なお、ほかの調査区からは基部について分析できるような破片は出土をみなかった。

#### （3）規格

底部径が復元できたのは前述の2点のみである。それぞれ18.0cmと23.6cmであった。底部高、口縁部径、体部突帯間高については小片のため明らかにしえない。

#### （4）調整

円筒埴輪の調整技法として、ナデ、タテハケ、ヨコハケが認められる。タテハケは2.0cmあたり18本程度の細かいハケ目をもち、ヨコハケは2.0cmあたり12本程度の粗いハケ目をもち、うち6にB種ヨコハケが認められる。外面は一次調整のタテハケを施したのち、二次調整のヨコハケを施している。ところどころに一次調整のタテハケが残っており、やや粗雑な印象を受

ける。内面は一次調整のタテハケを施したのち、二次調整のユビナデを施すものと、一次調整を省略してユビナデのみを施すものがある。

## (2) 焼成方法

胎土は0.1 cm以下の砂礫を含むものを基本として、0.2～0.5 cmの砂礫がやや多く混じるもの(A)と、ほとんど含まない緻密なもの(B)にわけられる。(A)は石英、長石、チャートを含み、浅黄色、にぶい黄橙色、橙色を呈する個体に多く、(B)は長石、チャート、シャモットを含み、にぶい橙色、にぶい黄色を呈する個体に多い。また、黒斑を有する個体および破片は現状で確認できない。しかし、後述する盾形埴輪や甲冑形埴輪に黒斑が認められることから、円筒埴輪に黒斑がないと明言することは避けておきたい。なお、器壁の厚さに関わらず芯はおおよそ黒色を呈する。

## (3) その他

透かしは円形のみが確認できる(12・13)。突帯設定技法についてはヘラナデを施したものがみられる(5)。赤色顔料の付着は確認できない。

## 朝顔形埴輪

1 トレンチ SD06 上面より口縁付近の破片および口縁部突帯片が出土した(16・17)。17は口縁付近の破片で、内面にヨコハケを施す。16は口縁部突帯片で、一次口縁部の先端上面に二次口縁部を乗せたうえで接合させたのち、接合部外面に突帯を設置している。個体数や法量は不明確なものの、いずれも胎土(B)で表面はにぶい橙色を呈している。

## まとめ

これまで円筒埴輪と朝顔形埴輪の報告をおこなってきた。しかし、資料の乏しさから十分な分析をおこなうことはできなかった。ただ、製作年代については、外面2次調整が省略される傾向にある点や、底径が小さい点、また底部調整を施さない点、黒斑を有しない点、突帯のほとんどがb類である点、口縁部の形態から、当墳の円筒埴輪が、山城の円筒埴輪編年(梅本2003)のⅢ-3～4期に位置付けられる可能性を示しておきたい。

## 形象埴輪

形象埴輪として、蓋形・盾形・靱形・甲冑形埴輪がある。出土地点はいずれも墳丘裾付近に集中している。1 トレンチでは、蓋形埴輪の小片のほかに器種の特定できる形象埴輪は認められないが、2・3 トレンチでは比較的大ぶりの盾形・甲冑形埴輪片がまとまって出土している。2 トレンチでは蓋形・靱形埴輪片も確認できる。いっぽう、4 トレンチからの出土は盾形埴輪片1点に留まる。これら形象埴輪片は、その大半が小片であるため、接合による各個体の全容復元は困難であった。このことから、部位の形状や胎土・色調などから個体識別をおこなうこととし、器種が特定できなかった破片は不明形象埴輪として報告した。なお、各埴輪の胎土については後に小節をもうけて報告したい。

## (1) 蓋形埴輪 (図 28・18～21)

1 トレンチで1個体分、2・3 トレンチで各1点の埴輪片が確認できた。これらは、いずれも埴丘流土中からの出土であり、埴頂からの転落と考えられる。破片は小さく接合がかなわないことも多かったため、全容の復元には至らなかった。以下に図化しえた破片を取り上げると、18は軸受け部下端突帯の破片である。突帯外側で直径16.0 cmを測る。形態からは朝顔形埴輪の頸部ともなし得るが、1 トレンチ出土の蓋形埴輪と胎土・焼成が似ており、蓋形埴輪あると判断できる。21 軸受け部から笠部にかけての破片である。軸受け部下端突帯が剥離しており、剥離面にはハケ調整後に刻み目を施している。このことから、笠部または軸受け部までを一括成形してから、いったん調整を施したのち、刻み目を施して突帯を貼り付けたと考えられる。また、笠縁の粘土と、軸受け部と笠縁を接合したとみられる粘土について、胎土・色調の面で大きく異なることから、この個体については複数種の粘土を用いたことが明らかである。19・20は笠部の笠縁である。19は2条の線刻をめぐらせ、縦方向には3条一組の線刻を施す。

## (2) 盾形埴輪 (図 28 図 29・22～31)

2 トレンチからまとまって出土しているが、3・4 トレンチからも各1点出土している。いずれも流土中からの出土で、埴頂からの転落と考えられる。22～27は盾面である。22～26は界線で、22～24は3条以上の沈線と綾杉文で表現している。沈線間隔は約1.0 cmである。25は5条の沈線と綾杉文で表現している。沈線間隔は22～24よりやや広く約1.2 cmで、また原体を比較しても形状が異なることから、25は別個体として分けることができると考えられる。裏面にはユビナゲ調整が施される。27は外区で、鋸歯文を線刻する。鋸歯文は3条の縦方向の沈線と1条の横方向の沈線を基準として大小の山形を線刻し、その間に6～7本の平行沈線を充足している。28は円筒部と盾面の接合部である。この盾形埴輪は、円筒部の正面を盾面として利用しつつ、必要分の幅を得るためにその両端に粘土板を取り付けて盾面とするタイプであり、言い換えると、円筒部から盾面が半ば独立した容態であるといえる。29・30についても同様に円筒部と盾面の接合部と考えられるのであるが、この盾形埴輪は鰭付円筒埴輪のように、円筒部の両端に粘土を取り付けて盾面とするタイプである。このことから、あるいは靱形埴輪とも考えられる。なお、29は裏面の中央に倒楕円形の黒斑がみられる。これは突帯支持帯が剥離したものと考えられる。31は突帯支持帯で、円筒部をめぐる突帯が盾面付近で斜め上にのび、粘土帯として盾面に接続する。突帯が斜め上にのびるのは盾面隅を支持するためであると考えられるため、この破片は円筒部に複数取り付く突帯支持帯のなかでも円筒部の口縁部から数えて2～3段目の突帯であったと想定できる。なお、23・26・27の盾面には赤色顔料が付着している。

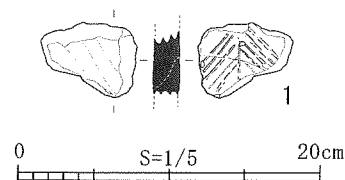


図 26 旧調査時出土盾形埴輪

ちなみに、内区の文様については今回の調査では明らかにならなかったが、前回調査で南墳西側の表土から内区の破片 (図 26) が出土している。これは胎土・焼成が今回出土した盾形埴

輪と類似しており、同一個体であると考えられる。このことから、今回出土した盾形埴輪の内区は菱形文で充足されていたと考えられる。

### (3) 靱形埴輪 (図 29・32)

本調査で出土した唯一の靱形埴輪は、2 トレンチ SX02 底面に突き刺さった状態で出土した。SX02 直下の一次流土層に含まれる遺物であるから、墳頂からの転落と考えられる。SX02 の保存のため、一部の一次流土層が調査できなかったことが要因であるのか、このほかに靱形埴輪片は出土をみなかった。32 は矢筒部の破片である。外面には梯子文を刻んで横帯とし、その上部に直弧文とみられる線刻を施す。

### 甲冑形埴輪

2・3 トレンチから出土しており、成形方法や胎土・焼成からみて少なくとも 2 個体が確認できる。草摺部と短甲部の接続部にあたる破片が確認できるため、当墳の甲冑形埴輪が草摺部と短甲部を一括成形するタイプ (高橋分類Ⅰ類二式またはⅡ類) であったことが考えられる。ただし、前回調査で南北墳間の谷部から短甲部に接続する可能性がある冑部が出土していることから (図 27)、冑部から草摺部までを一括成形するタイプ (高橋分類Ⅱ類) であった可能性も考えられる。

#### (1) 甲冑形埴輪 1 (図 29・33、36)

3 トレンチより出土した。草摺部の破片と、草摺部から短甲部にかけての破片が確認できる。33 は草摺部の破片である。3 本一組の横線帯を複数めぐらし、その間に 2 条の綾杉文を線刻する。34 は草摺部から短甲部にかけての破片で、腰带上端で 32.6 cm を測る。腰帯には斜格子状の線刻が施されている。草摺部には 2 条一組の縦線帯が施されている。

#### (2) 甲冑形埴輪 2 (図 29・35)

35 は草摺部から短甲部にかけての破片である。円筒部に幅約 2 cm、高さ約 1.5 cm の突帯をめぐらしたのち、突帯上部に粘土を貼り付けて線刻を施し、腰帯を表現している。その上部には方形の粘土貼付と、それを起点として左斜め上方向にのびる線刻を確認でき、短甲の革綴と三角板を表現している。突帯下部には剥離した痕跡がみえ、ここには草摺部がとりついたと考えられる。

#### (3) 帰属不明の甲冑形埴輪 (図 29・34)

34 は、2 トレンチから出土した草摺部である。外面には綾杉文を 2 条施し、内面には粘土紐接合部にユビオサエ調整を施す。綾杉文がゆるやかな弧を描き、破片上部の剥離面付近がやや肥厚するため、円筒部との接続部に近い破片であると考えられる。線刻や胎土・焼成は甲冑形埴輪 1 と似通っており、同一個体の可能性も考えられる。

#### 不明形象埴輪 (図 29・37 ～ 39)

37 は外面にハケ調整後に線刻を施す。粘土紐の幅の短さや、断面がゆるやかに湾曲している様子から、甲冑形埴輪の可能性が考えられる。38 は両面にユビオサエが施されており、片面には剥離によると考えられる黒変部がみられる。形象埴

輪の内部に支持として貼り付ける、粘土帯である可能性がある。39は縦方向に数本の線刻を施したのち、横方向にも同様の線刻を施す。やや粗雑な網代様を呈しており、家形埴輪の屋根部片である可能性が考えられる。

### まとめ

これまで、形象埴輪の報告をおこなってきた。資料の事情により明らかにしえなかった部分も多分にあるが、盾形埴輪や甲冑形埴輪のおおよその復元など、一定の知見を得ることができた。以下では、これをもとにした形象埴輪の製作技法・胎土・年代の検討をおこない、当墳の築造時期や被葬者の性格を考えるうえでの基盤としたい。

#### (1) 製作技法

なかでも甲冑形埴輪2である35は特徴的である。円筒部に幅約2cm、高さ約1.5cmという比較的大きめの突帯をめぐらしたのち、突帯上部から円筒部にかけては帯板状の粘土を貼り付けて腰帯を表現し、突帯下部には逆ろうと状に粘土紐をめぐらしていつて草摺部を形づくっている。同様の技法を用いたものに兵庫県時光寺古墳出土例があるが、類例はそう多くない。当墳の形象埴輪の製作者集団を考えるうえで注目に値する点であろう。

#### (2) 胎土

前述の内容で当墳の円筒埴輪の胎土を大きく2種に分けた。石英、長石、チャートを含み、浅黄色、にぶい黄橙色、橙色を呈する(A)と、長石、チャート、シャモットを含み、にぶい橙色、にぶい黄色を呈する(B)である。この分類は形象埴輪についても同様のことが言え、蓋形・盾形・鞍形・甲冑形埴輪1は(A)に、甲冑形埴輪2は(B)に分けられる。ことから、形象埴輪の製作についても複数の製作工人集団の参画が予想される。

#### (3) 年代

甲冑形埴輪については高橋克壽や高橋工、村瀬陸氏により分類がなされているが、高橋克壽分類では、1類2式ないし2類に分類される。現状においては具体的な年代を明らかにしえないうが、甲冑形埴輪2や前回調査出土の冑部(ただし、北墳に伴う可能性もある)に三角板革綴の表現がなされていることから、5世紀後半は下らないと思われる。

盾形埴輪については高橋克壽、桜井久之、高橋工、田中秀和氏などにより分類がなされているが、盾面の施文に注目された高橋工分類では、外区の文様が3類、界線c類、内区2類にあてられており、古墳5～7期(4世紀末～5世紀中ば)に位置づけられている(高橋工1991)。また、断面形態に注

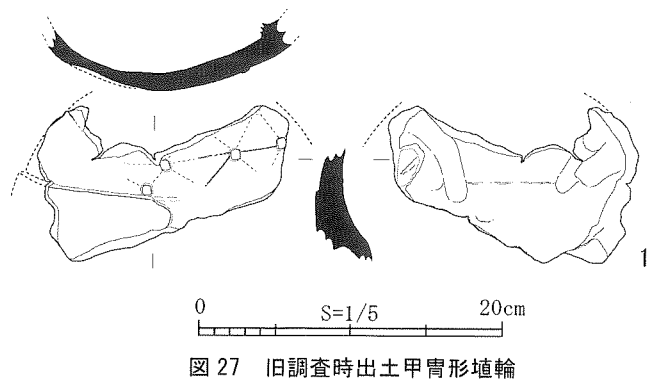


図27 旧調査時出土甲冑形埴輪

表 1 出土遺物観察表（埴輪）

| 遺物<br>No. | 種類    | 部位   | 調整                 |              | 色調            | 出土<br>調査区 | 出土層位             | 実測<br>番号 | 備考                           |
|-----------|-------|------|--------------------|--------------|---------------|-----------|------------------|----------|------------------------------|
|           |       |      | 外面                 | 内面           |               |           |                  |          |                              |
| 1         | 円筒埴輪  | 口縁部  | タテハケ               | タテハケ         | 橙             | 南墳-2      | 黄褐色土             | 2-27     |                              |
| 2         | 円筒埴輪  | 口縁部  | タテハケ<br>のち<br>ヨコハケ | ナデ           | にぶい黄橙<br>～明黄褐 | 南墳-1      | 断割               | 1-27     |                              |
| 3         | 円筒埴輪  | 口縁部  | タテハケ               | ヨコハケ         | 明黄褐～<br>にぶい黄橙 | 南墳-3      | 廃土               | 3-51     |                              |
| 4         | 円筒埴輪  | 口縁部  | タテハケ<br>のち<br>ヨコハケ | ナデ           | にぶい黄橙<br>～明黄褐 | 南墳-1      | 褐色砂質土            | 1-1      |                              |
| 5         | 円筒埴輪  |      | タテハケ               | ナデ           | 橙             | 南墳-3      | 褐色砂質土            | 3-25     |                              |
| 6         | 円筒埴輪  | 突帯   | ヨコハケ               | ナデ           | 浅黄            | 南墳-4      | 灰黄褐色土            | 4-4      |                              |
| 7         | 円筒埴輪  | 突帯   |                    | ナデ           | 黄橙～<br>明黄褐    | 南墳-1      | SD06             | 1-6      |                              |
| 8         | 円筒埴輪  | 突帯   | タテハケ               | ナデ           | 橙             | 南墳-1      | 褐色砂質土            | 1-17     |                              |
| 9         | 円筒埴輪  | 突帯   |                    | ナデ           | にぶい黄橙<br>～明黄褐 | 南墳-2      | 橙斑土              | 2-39     |                              |
| 10        | 円筒埴輪  | 突帯   |                    | ナデ           | にぶい黄橙         | 南墳-2      | 褐色砂質土            | 2-41     |                              |
| 11        | 円筒埴輪  | 突帯   |                    | ナデ           | 黄橙            | 南墳-1      | 断割               | 1-7      |                              |
| 12        | 円筒埴輪  | 突帯   | ヨコハケ               | ナデ           | にぶい黄褐         | 南墳-1      | 黄褐色土、北断割         | 1-4      | 2か所に刺突痕？ 円形透かし孔              |
| 13        | 円筒埴輪  | 底部   | タテハケ<br>のち<br>ヨコハケ | ナデ           | 橙～明赤褐         | 南墳-1      | 黄褐色土<br>褐色砂質土、廃土 | 1-49     | 底径18.0cm、残存高10.6cm、底部に蕨状植物圧痕 |
| 14        | 円筒埴輪  | 底部   | ヨコハケ               | ナデ           | 橙～明赤褐         | 南墳-1      | 褐色砂質土、壁          | 1-50     | 底径23.6cm、残存高9.0cm            |
| 15        | 朝顔形埴輪 | 口縁付近 |                    | ヨコハケ<br>のちナデ | 橙             | 南墳-1      | SD06             | 1-16     |                              |
| 16        | 朝顔形埴輪 | 突帯   |                    | ナデ           | 橙             | 南墳-1      | SD06             | 1-15     |                              |
| 17        | 蓋形埴輪  | 笠縁   |                    | ユビオサエ        | 明黄褐～<br>にぶい黄橙 | 南墳-1      | 褐色砂質土            | 1-9      |                              |
| 18        | 蓋形埴輪  | 笠縁   |                    |              | 明黄褐～橙         | 南墳-1      | 褐色砂質土            | 1-14     |                              |
| 19        | 蓋形埴輪  | 突帯   | ヨコハケ               |              | 明黄褐           | 南墳-2      | 廃土               | 2-45     | 突帯部径16.0cm、残存部高2.8cm         |
| 20        | 盾形埴輪  | 盾面   |                    | ハケ           | 橙             | 南墳-2      | 北断割              | 2-9      | 盾面は黒斑に覆われる                   |
| 21        | 盾形埴輪  | 盾面   |                    |              | 明黄褐           | 南墳-2      | 褐色砂質土            | 2-4      | 盾面に赤色顔料付着                    |
| 22        | 盾形埴輪  | 盾面   |                    | ナデ           | にぶい黄褐         | 南墳-2      | 黄褐色土             | 2-2      |                              |
| 23        | 盾形埴輪  | 盾面   |                    |              | 浅黄～<br>にぶい黄橙  | 南墳-2      | 橙斑土              | 2-18     | 円筒部との接合面にナデを施す<br>盾面に赤色顔料付着  |
| 24        | 盾形埴輪  | 盾面   | ハケ                 | ハケ           | 浅黄橙～<br>にぶい黄褐 | 南墳-2      | 橙斑土、褐色砂質土        | 2-3      | 盾面に赤色顔料付着                    |
| 25        | 盾形埴輪  |      |                    |              | 黄灰～<br>にぶい黄橙  | 南墳-2      | 橙斑土              | 2-10     |                              |
| 26        | 盾形埴輪  |      |                    |              | にぶい黄橙<br>～浅黄橙 | 南墳-2      | 橙斑土              | 2-21     |                              |
| 27        | 盾形埴輪  |      |                    |              | 浅黄～<br>明黄褐    | 南墳-4      | 廃土               | 4-2      |                              |
| 28        | 盾形埴輪  | 粘土板  |                    | ナデ           | 浅黄～<br>にぶい黄褐  | 南墳-2      | 橙斑土、褐色砂質土        | 2-16     |                              |
| 29        | 穀形埴輪  | 矢筒部  |                    |              | にぶい黄橙         | 南墳-2      | SX02             | 2-23     |                              |
| 30        | 甲冑形埴輪 | 草摺部  |                    | ユビオサエ        | 明黄褐           | 南墳-3      | 褐色砂質土            | 3-2      |                              |
| 31        | 甲冑形埴輪 | 草摺部  |                    | ユビオサエ        | 橙～浅黄橙         | 南墳-2      | 黄褐色土             | 2-15     |                              |
| 32        | 甲冑形埴輪 | 草摺部  |                    | ナデ           | 橙～明黄褐         | 南墳-2      | 南断割              | 2-22     | 短甲部との接合部                     |
| 33        | 甲冑形埴輪 | 草摺部  | ハケ                 | ナデ           | 橙～明黄褐         | 南墳-3      | 褐色砂質土            | 3-22     | 短甲部との接合部                     |
| 34        | 形象埴輪  |      | ユビオサエ              | ナデ           | 明黄褐           | 南墳-2      | 北断割              | 8        | 甲冑形埴輪か                       |
| 35        | 形象埴輪  |      |                    | ユビオサエ        | 黄橙            | 南墳-2      | 褐色砂質土            | 2-24     | 粘土板か                         |
| 36        | 形象埴輪  |      | ヨコハケ               |              | にぶい黄橙         | 南墳-3      | 黄褐色土             | 2-31     | 家形埴輪の屋根部（網代）か                |
| 37        | 円筒埴輪  | 口縁部  |                    | ナデ           | 橙             | 北墳<br>東区  | 墳丘流土①            | 2        | 外面に線刻あり、胎土に1mm以下の金雲母が混じる     |
| 38        | 円筒埴輪  | 突帯   | ヨコハケ               | ナデ           | にぶい赤褐<br>～橙   | 北墳<br>西区  | 墳丘流土①            | 1        |                              |
| 39        | 円筒埴輪  | （口種） |                    |              | 橙             | 北墳<br>東区  | 褐色砂質土            | 3-26     | 外面に線刻あり                      |
| 64        | 円筒埴輪  |      | ヨコハケ               |              | 黒～橙           | 北墳<br>東区  | 褐色砂質土            | 22       |                              |
| 65        | 円筒埴輪  | 底部   | タテハケ               | ユビオサエ        | 明褐～橙          | 北墳<br>西区  | 墳丘流土①            | 5        |                              |
| 66        | 円筒埴輪  | 底部   |                    |              | 赤褐            | 北墳<br>西区  | 墳丘流土②            | 14       |                              |
| 67        | 蓋形埴輪  | 笠部   |                    | ユビオサエ        | 明黄褐～橙         | 北墳<br>東区  | 墳丘流土①            | 15       |                              |
| 68        | 形象埴輪  |      | タテハケ<br>のち<br>ヨコハケ | ナデ           | 橙             | 北墳<br>東区  | 墳丘流土①            | 10       | 蓋形埴輪か                        |
| 69        | 形象埴輪  |      |                    | ナデ           | 橙             | 北墳<br>東区  | 墳丘流土①            | 12       | 蓋形埴輪か                        |
| 70        | 不明埴輪  |      |                    |              | 褐灰～橙          | 北墳<br>南東区 | 墳丘流土②            | 24       |                              |

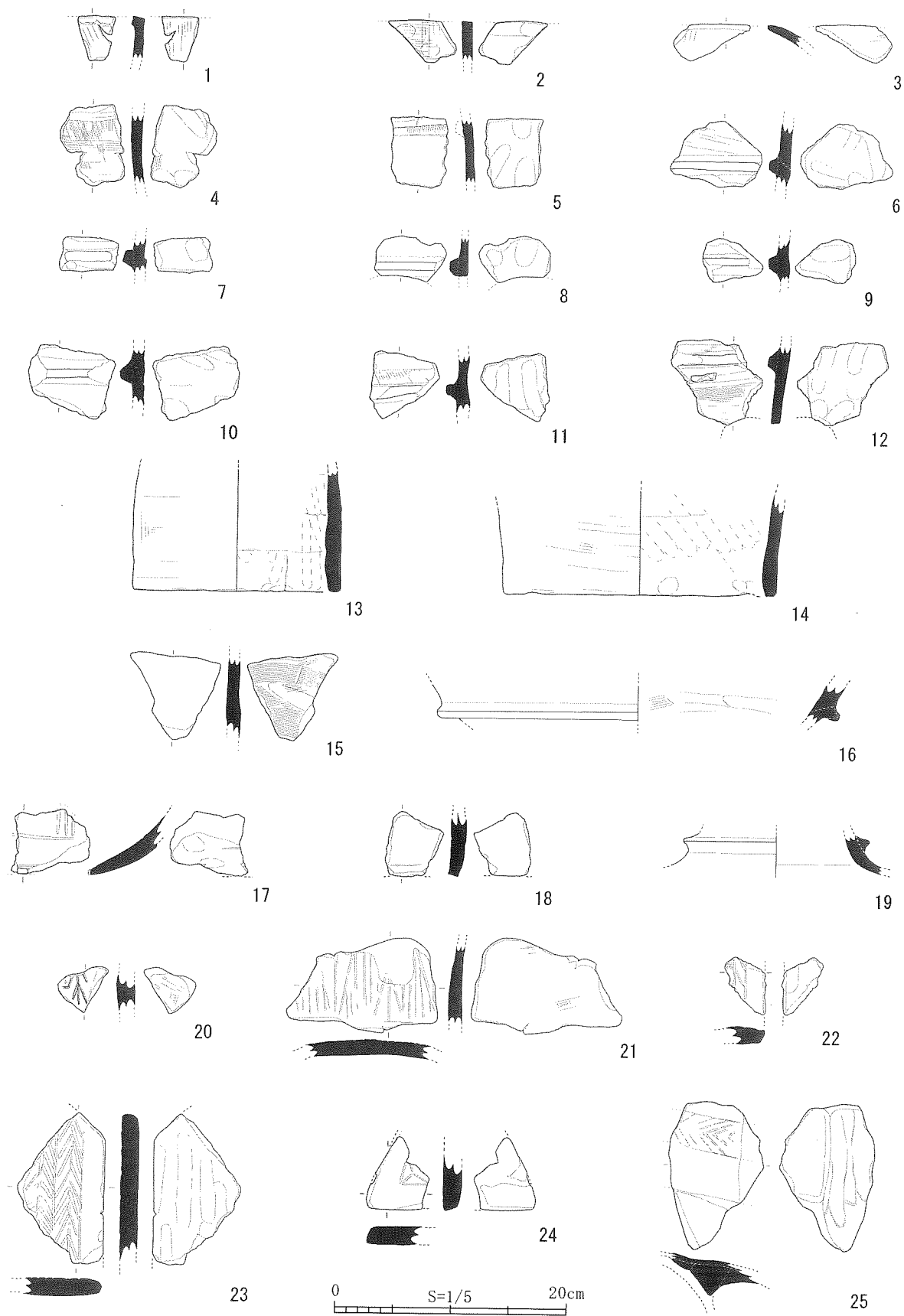


図 28 出土遺物実測図（南墳出土埴輪）

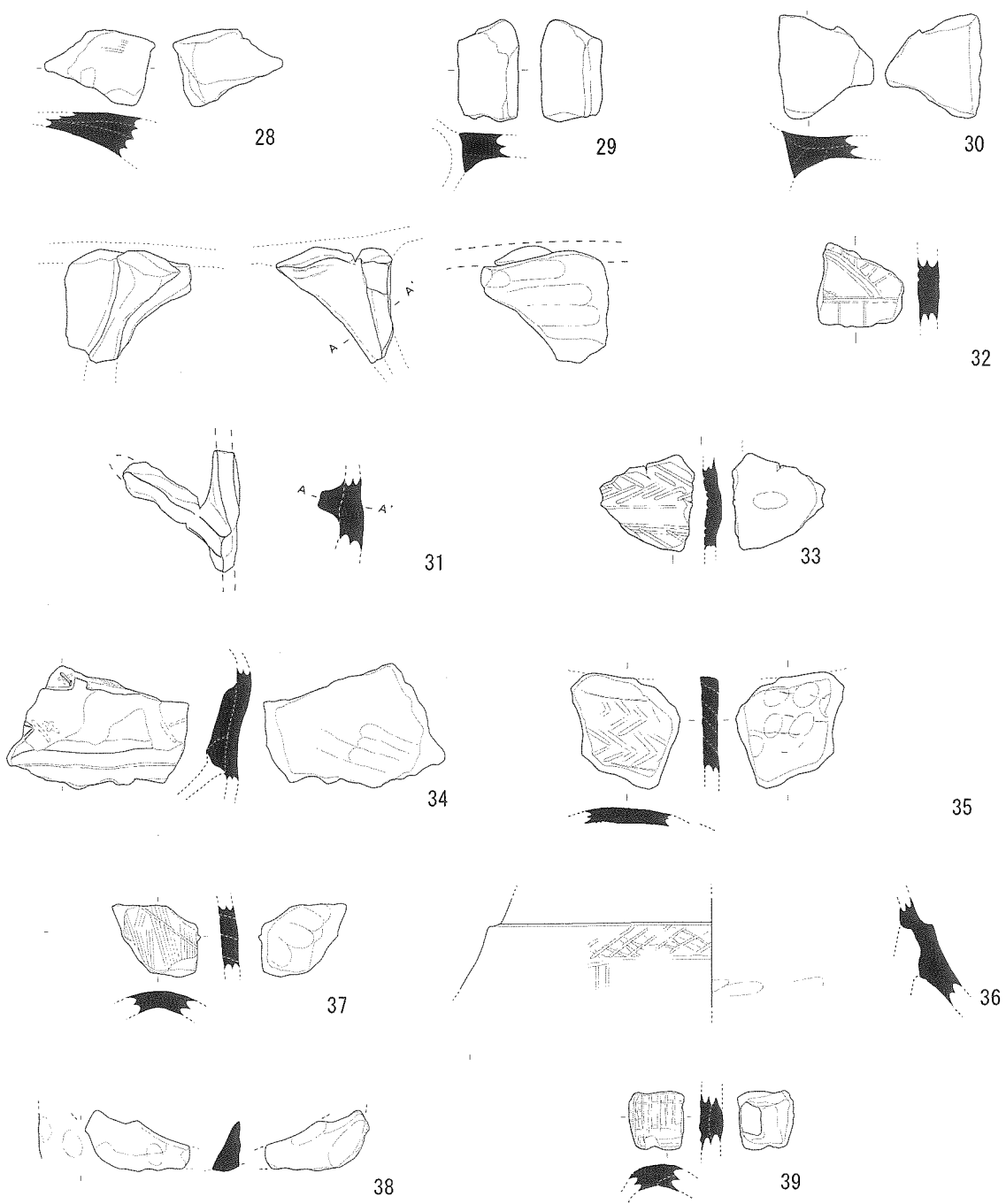


图 29 出土遺物実測図（南墳出土埴輪）

目された田中分類では断面がC類、鋸歯文がb-2類にあてられ、こちらは川西IV期（5世紀中～後期）に位置づけられている（田中秀和 1994）。以上のことから、当墳の盾形埴輪は5世紀中葉に位置づけられるものと考えられる。

なお、盾形埴輪のみに黒斑がみられるのは、何か特異的な事情があったと考えることができるのではなかろうか。大きく妄想をふくらませば、当墳の埴輪が製作された時期は、山城地域の埴輪製作に窖窯が導入されそれが主体となりつつあった時期であって、大型の盾形埴輪を焼成できるような窖窯設備が未完成だったのかもしれない。

ともあれ、円筒埴輪と形象埴輪の両方の分析から、当墳の埴輪は5世紀中葉に位置づけられるものであり、これは後述する須恵器の年代とも齟齬はない。ただし、主体部の年代とは若干の時期差が認められ、むしろ北墳に近い年代となることは大きな問題である。これをどう解釈するかが喫緊の課題であり、当墳の性格、当地域の首長系列を考えるうえで重要な問題である。

#### 須恵器（図 30・40～45）

本調査では、古墳にともなう須恵器が複数出土した。後述する 40 をのぞいて、1 トレンチ SD06 から出土した。器種が判明したものは甕・器台である。いずれも近接した地点からまとまって出土しており、墳頂からの転落と考えられる。40 は高坏形器台の鉢部片である。二次流土層中からの出土であり、墳頂からの転落であると考えられる。鉢部は内湾しながら外方にひらき、中ほどで角度を変えて大きくひらく。外面は鉢下部に平行タタキを施したのち、鉢中部に2条一組の沈線を引き区画する。区画の間には1条の波状文を施す。後述する 41～45 と比べて施文方法がやや雑で、焼成・色調も異なるため、41～45 とは別の個体であると判断できる。41～45 は高坏形器台である。41 は鉢部片で、外面には2本一組の突線の下に2条の波状文を施す。さらにその下には段を有する。42 も鉢部片で、外面には41 と同じく段を有し、その下には平行タタキを施す。内面には無文当て具痕がみられる。43～45 は脚部片である。45 は、脚が外反し底部付近でさらに角度を変えて広がる。底径の約半分、また脚部全体の約半分が残存しており、底径 22.7cm、脚高 17.9cm を測る。外面は2条一組の突線で3段に区画し、その間に2～3条の波状文を施す。上・中段には6方に長方形の透かし孔を直列に穿ち、下段には上の2段とは千鳥状となるように三角形の透かし孔を6方に穿つ。脚部の法量から脚付壺の可能性も考えられたが、その色調と胎土から 40・41 と同一個体、あるいはこれらのような形状の鉢部を有していた可能性が高いため、高坏形器台であると判断した。43・44 はいずれも 45 と胎土・色調が近似しているが、接合状況から 45 とは別個体であることが確実である。これは、同一工人ないし同一工人集団の手による器台が少なくとも2個体あったことを示している。46・47 は、甕の体部片である。外面は平行タタキを施し、内面は同心円状当て具痕にスリケン調整をおこなう。器壁は薄く、外面は黒色を呈している。

時期については、41～45 が5世紀中葉（TK208）に位置付けられ、46・47 も同時期と考えら

表2 出土遺物観察表(その他)

| 遺物<br>No. | 器種   | 器形        | 調整            |                       | 法量(残存部)   |        | 色調           | 出土<br>調査区       | 出土<br>層位        | 時期                                | 実測<br>番号 | 備考                             |
|-----------|------|-----------|---------------|-----------------------|-----------|--------|--------------|-----------------|-----------------|-----------------------------------|----------|--------------------------------|
|           |      |           | 外面            | 内面                    | 器高        | 口径     |              |                 |                 |                                   |          |                                |
| 40        | 須恵器  | 器台<br>鉢部  | 平行タタキ         |                       | (8.0) cm  |        | 灰            | 南墳-2            | 黄褐色土            |                                   | 2-33     |                                |
| 41        | 須恵器  | 器台<br>鉢部  | ヨコナデ          | ヨコナデ                  | (5.9) cm  |        | 青灰           | 南墳-1            | SD06            | 5世紀後半<br>(TK208)                  | 1-47     |                                |
| 42        | 須恵器  | 器台<br>鉢部  | 平行タタキ         | 無文タタキ                 |           |        | 灰白~灰         | 南墳-1            | SD06            | 5世紀後半<br>(TK208)                  | 1-48     |                                |
| 43        | 須恵器  | 器台<br>脚台部 | ヨコナデ          | ヨコナデ                  | (19.6) cm |        | 明青灰~灰白       | 南墳-1            | SD06、壁          | 5世紀後半<br>(TK208)                  | 1-30     | 底径22.7cm(ただし<br>歪みあり)。         |
| 44        | 須恵器  | 器台<br>脚台部 | ヨコナデ          | ヨコナデ                  | (4.7) cm  |        | 灰~灰白         | 南墳-1            | SD06            | 5世紀後半<br>(TK208)                  | 1-31     | No. 45とは別個体。                   |
| 45        | 須恵器  | 器台<br>脚台部 | ヨコナデ          | ヨコナデ                  | (3.3) cm  |        | 灰白~灰黄        | 南墳-1            | SD06            | 5世紀後半<br>(TK208)                  | 1-32     | No. 45とは別個体。                   |
| 46        | 須恵器  | 壺         | 平行タタキ         | 同心円文<br>タタキのち<br>スリケシ |           |        | 灰~暗灰         | 南墳-1            | SD06            | 5世紀後半<br>か                        | 1-35     | 外面は黒色を呈し、<br>断面はにぶい赤色を<br>帯びる。 |
| 47        | 須恵器  | 壺         | 平行タタキ         | 同心円文<br>タタキのち<br>スリケシ |           |        | 灰~暗灰         | 南墳-1            | 褐色砂質土           | 5世紀後半<br>か                        | 1-34     | 外面は黒色を呈し、<br>断面はにぶい赤色を<br>帯びる。 |
| 48        | 須恵器  | ナデ        | ナデ            | ナデ                    |           |        | 灰            | 南墳-3            | 黄褐色土            |                                   | 3-4      | 壺類の肩部片。<br>ヘラ記号あり。             |
| 49        | 須恵器  | 杯蓋        | ナデ            | ナデ                    |           |        | 灰            | 南墳-2            | SX02            | 6世紀中葉<br>(TK10)                   | 2-30     |                                |
| 50        | 須恵器  | 杯B        | ナデ            | ナデ                    | (3.7) cm  | 13.4cm | 灰白           | 南墳-3            | 褐色土             | 8世紀末<br>(飛鳥V)                     | 3-41     |                                |
| 51        | 須恵器  | 杯A        | ナデ            | ナデ                    | 2.8cm     | 19.2cm | 灰白           | 南墳-1            | 壁               | 8世紀末<br>(飛鳥V)                     | 1-45     |                                |
| 52        | 土師器  | 皿S        | ナデのち<br>ユビオサエ | ナデ<br>のちハケ            | 1.9cm     | 10.0cm | 淡黄橙          | 南墳-2            | 灰黄褐色土           | 18世紀中葉<br>(京XIV)                  | 2-32     |                                |
| 53        | 土師器  | 皿         | ナデ            | ナデ<br>のちハケ            | (1.0) cm  | 12.2cm | 橙            | 南墳-1            | SD06            | 10世紀後半<br>(京IV)                   | 1-38     |                                |
| 54        | 土師器  | 皿S        | ナデ            | ナデ                    | (0.7cm)   | 10.2cm | 橙            | 南墳-2            | SX02            | 19世紀後半<br>(京XV)                   | 2-36     | 口縁部にスス付着                       |
| 55        | 土師器  | 鉢         | ナデ            | ナデ                    | (7.2cm)   | 21.0cm | にぶい黄褐<br>~明褐 | 南墳-4            | 名黄褐色土<br>(SX01) | 江戸                                | 4-7      |                                |
| 56        | 磁器   | 白磁碗       |               |                       |           |        | 淡黄           | 南墳-1            | 灰黄褐色土           | 11世紀後半~<br>12世紀前半<br>(大宰府碗<br>II) | 1-29     |                                |
| 57        | 磁器   | 染付        |               |                       |           |        | 明緑灰          | 南墳-3            | 灰黄褐色土           | 18世紀前半                            | 3-43     | 肥前                             |
| 58        | 陶器   | 擂鉢        |               |                       |           |        | にぶい赤         | 南墳-1            | 灰黄褐色土           | 18世紀中葉<br>以前                      | 1-28     | 信楽                             |
| 59        | 陶器   | 擂鉢        |               |                       |           |        | 暗赤褐          | 南墳-3            | 黄褐色土            | 18世紀中葉                            | 3-42     | 信楽                             |
| 60        | 瓦    | 平瓦        | 斜格子文<br>タタキ   |                       |           |        | 灰黄~灰白        | 南墳-3            | SD02            | 古代                                | 3-45     | 山本瓦窯に伴う遺物<br>か                 |
| 61        | 寛永通宝 |           |               |                       |           |        |              | 南墳-1            | 灰黄褐色土           | 江戸                                | なし       | 遺物取り上げ番号<br>1トレNo. 16          |
| 62        | 寛永通宝 |           |               |                       |           |        |              | 南墳-2            | 灰黄褐色土           | 江戸                                | なし       | 遺物取り上げ番号<br>2トレNo. 6           |
| 63        | 寛永通宝 |           |               |                       |           |        |              | 南墳-2            | 灰黄褐色土           | 江戸                                | なし       | 遺物取り上げ番号<br>2トレNo. 13          |
| 74        | 須恵器  | 杯蓋        | ヘラケズリ         |                       | (3.1) cm  | 9.9cm  | 灰            | 北墳<br>北東拡張<br>区 | 表土              | 7世紀中葉<br>(TK217)                  | 4        |                                |
| 75        | 土師器  | 皿S        | ナデ            | ナデ                    | 1.2cm     | 8.5cm  | 橙            | 北墳<br>南東区       | 墳丘流土            | 19世紀中葉                            | 18       |                                |
| 76        | 土師器  | 皿S        | ナデ            | ナデ                    | 1.3cm     | 8.8cm  | 橙            | 北墳<br>南東区       | 墳丘流土①           | 江戸                                | 17       |                                |
| 77        | 土師器  | 皿S        | ナデ            | ナデ                    | (1.2) cm  | 9.0cm  | 橙            | 北墳<br>南東区       | 表土掘削            | 19世紀後半<br>(京XV)                   | 20       |                                |
| 78        | 土師器  | 皿S        | ナデ            | ナデ                    | (1.6) cm  | 9.5cm  | 橙            | 北墳<br>南東区       | 表土              | 江戸                                | 19       |                                |
| 79        | 土師器  | 皿S        | ナデ            | ナデ                    | (1.7) cm  | 11.0cm | 橙            | 北墳<br>南東区       | 墳丘流土①           | 17世紀前半~<br>中葉                     | 16       |                                |
| 80        | 煙管   |           |               |                       |           |        |              | 北墳<br>東区        | 墳丘流土①           | 17世紀初頭<br>(古泉II)                  | 7        | 銅製<br>雁首部が残存                   |

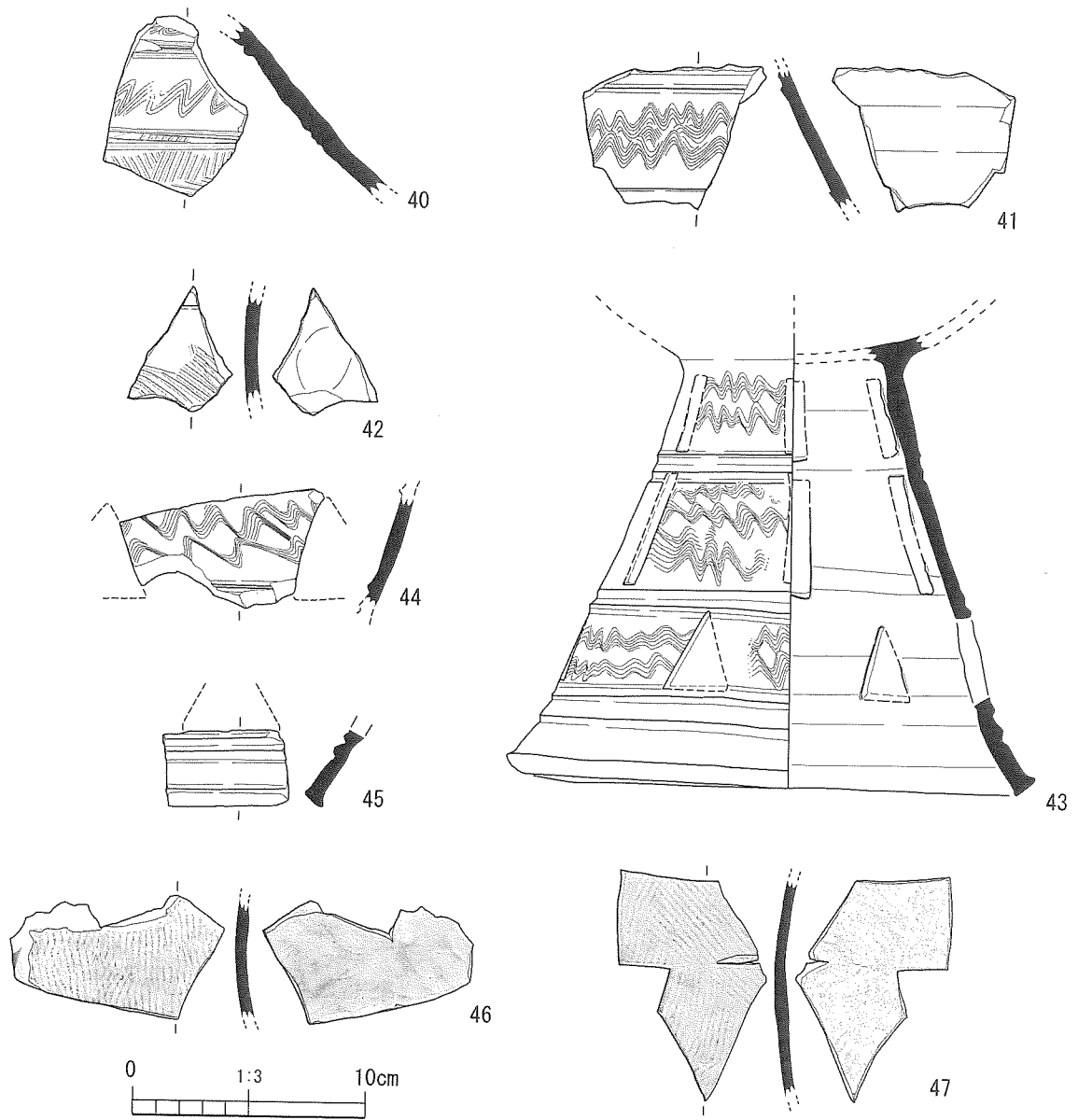


図 30 出土遺物実測図（南墳出土須恵器）

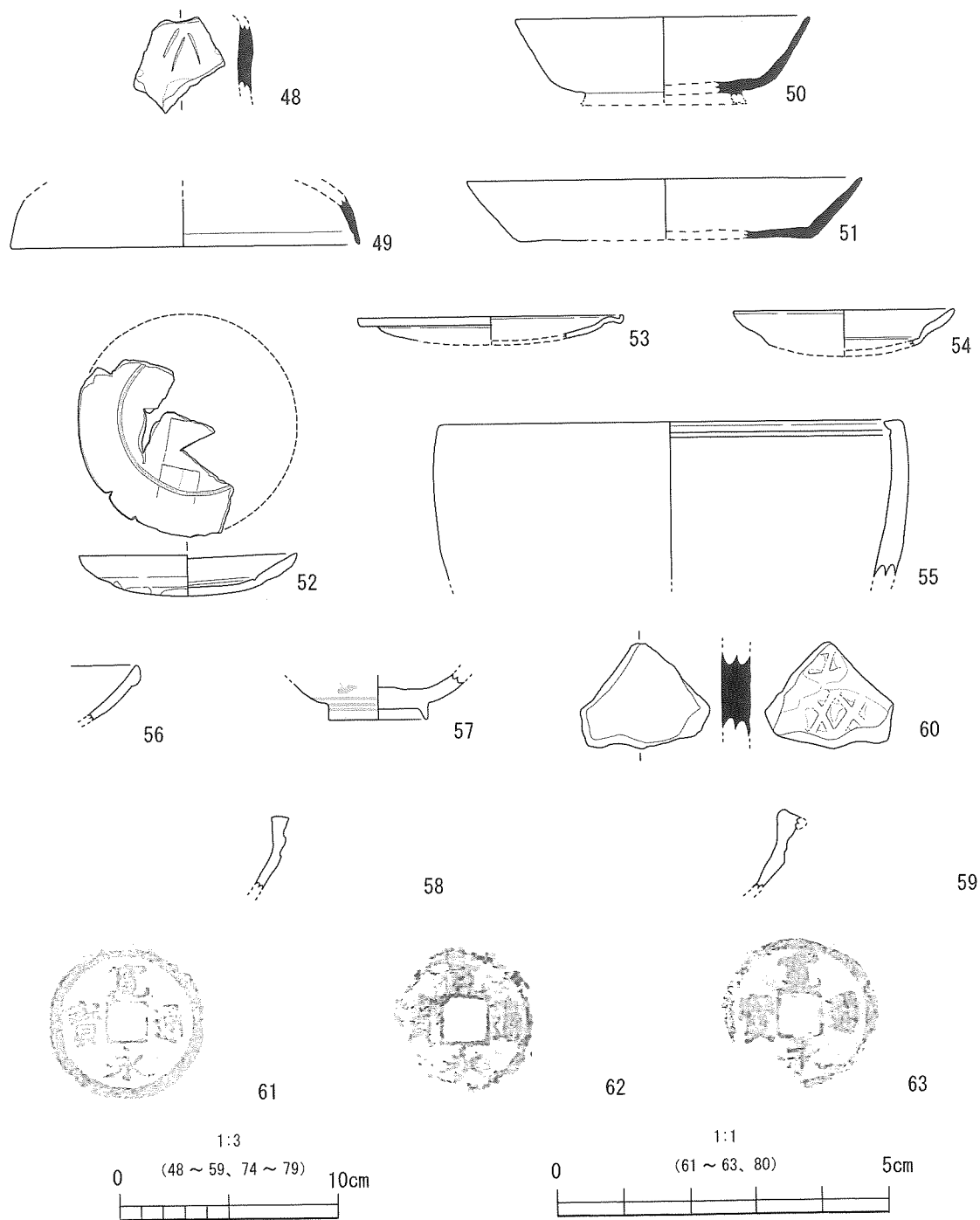


图 31 出土遺物実測図（南墳出土）

れる。40はその粗雑さから、ほかよりやや時期が下る可能性が考えられる。

### その他の遺物

当墳は古墳築造後も土地利用がなされてきた。昭和43年度の発掘調査では墳丘裾で平安時代の土壙墓が検出され、昭和43年度と今回の調査では墳丘の西側に近世の石列が検出された。このため、土壙墓・石列などにともなう遺物が腐植土層・墳丘流土層より出土しており、古墳築造後の墳丘利用を考えるための重要な知見を与えてくれる。以下では、これらのうち年代や種類が判明するものを種別にまとめ、報告したい。

#### (1) 須恵器 (図30 図31・46～51)

坏・坏蓋が出土した。48は3トレンチ出土の壺類の肩部と考えられる破片で、肩部にヘラ記号が記されている。49は坏蓋である。内面口縁部に段を有する。50・51は坏である。50は坏Bで高台がとりつく。51は坏Aで器壁は薄く焼成は甘い。遺物の各時期について、49は6世紀中葉(TK10)、50は7世紀後葉(MT21期)、51は8世紀中葉(平城Ⅲ期)にそれぞれ位置付けられる。なお、48のヘラ記号はTK208号窯固有の記号であるとの報告があるのため(田辺1958)、古墳にともなう遺物である可能性がある。

#### (2) 土師器 (図31・52～55)

皿・鉢がある。52・54は近世の土師皿で、内面に圈線を有する。52の外底面付近にユビオサエを施している。54は灯明皿で外面口縁付近にススが付着している。53は1トレンチSD06直上から出土した。いわゆる、ての字状の土師皿である。55は鉢の口縁部である。

時期については、53は10世紀後半ころに位置付けられる。なお、第1調査区の北に接する地点では、昭和43年度の調査で中世墓が検出されており、時期からみて53はこの中世墓に伴う遺物であると推定される。52・54はいずれも18～19世紀、55は近世以降の所産である。このほか52と同時期の土師器皿が少なくとも3枚出土しており、うち1枚の口縁部にはススが付着している。ほか2点については、第2調査区SX02と第4調査区SX01からの出土であった。しかし、いずれも小片のため図化はできなかった。

#### (3) 陶器・磁器 (図31・56～59)

#### (4) 瓦 (図31・60)

60は3トレンチから出土した。裏面に斜格子文タタキを施す。山本瓦窯に伴う遺物である可能性がある。

#### (5) 銭貨 (図31・61～63)

61～63は寛永通宝である。いずれも銅製で、うち25・26は古寛永銭である。

## 4 節 二子山古墳北墳の発掘調査

### 調査成果

北墳に伴う造り出しなどの祭祀施設の有無を確認するため、古墳の北方にのびる丘陵平坦部において調査区を設けた。丘陵の中央を基点としてL字状に2本設定し、東区、西区、南区、北区とした。東区と西区は長さ9m、幅1mの、南区は長さ7.5m、幅1.5m、北区は長さ10m、幅1.5mである。調査を進めると南区、北区、東区で溝と石列を検出したため、南区拡張区、北東拡張区、北西区、南東区を設けた。南区拡張区は長さ1.5m、幅1m、北東拡張区は長さ3.5m、幅1m、北西区は長さ2m、幅1m、南東区は長さ3.5m、幅2mである。さらに丘陵先端の堆積状況を確認するために長さ3m、幅0.5mの北区拡張区を、後述する土坑の範囲確認のため、長さ1.5m、幅1mの南東拡張区を設定した。

基本層序は上面から表土、流土層、地山の3層である。流土層は3層に分けられ、上層は褐色中粒砂質土で墳丘裾に堆積する。中層は1cm大の礫を含む明黄褐色砂質土で、墳丘斜面から裾にかけて広く堆積する。層上面では遺構を検出し、流土中に17世紀以降の遺物を包含する。下層は1.5～20cm大の礫を多量に含む黄褐色砂質土で、墳丘斜面に堆積する。この下において地山層を確認し、大型の土坑やピットを検出した。

### 主要遺構の時期と性格

#### (1) 溝 SD101

南区で検出した長さ約1.2m、幅約0.5m、深さ約0.1mの溝である。溝の標高は65.7mで、昭和43年度の墳丘東側の調査で検出された埴輪列の標高とほぼ同じである。墳丘に沿って地山を掘り込んでいるため、埴輪列掘形の可能性がある。遺物は確認できなかった。

#### (2) ピット SP102

北区で検出した径約0.5m、深さ約0.7mの円柱状を呈した遺構で、地山を深く掘り込んでいる。柱穴の可能性が考えられるが、埋土に柱の痕跡や遺物は確認できなかった。時期は、土坑SK113に先行する可能性がある。

#### (3) 溝 SD104・SD105・SD106

北区および西区、南区で検出した。いずれも幅約0.5m、深さ約0.2mの北東から南西にのびる溝で、畑にともなう畝溝であった可能性が高い。遺物は確認できなかったが、17世紀を下限とする。

#### (4) 溝 SD107・SD108・SD109

東区で検出した。長さ約1.0m、幅約0.6m、深さ約0.1～3mの南北にのびる溝で、畑にともなう畝溝であった可能性がある。遺物は確認できなかったが、17世紀を上限とする。

#### (5) 石列 SX111

東区で検出した石列である。10～20cm大の石が6つ集まり列をなしているが、石組遺構とい

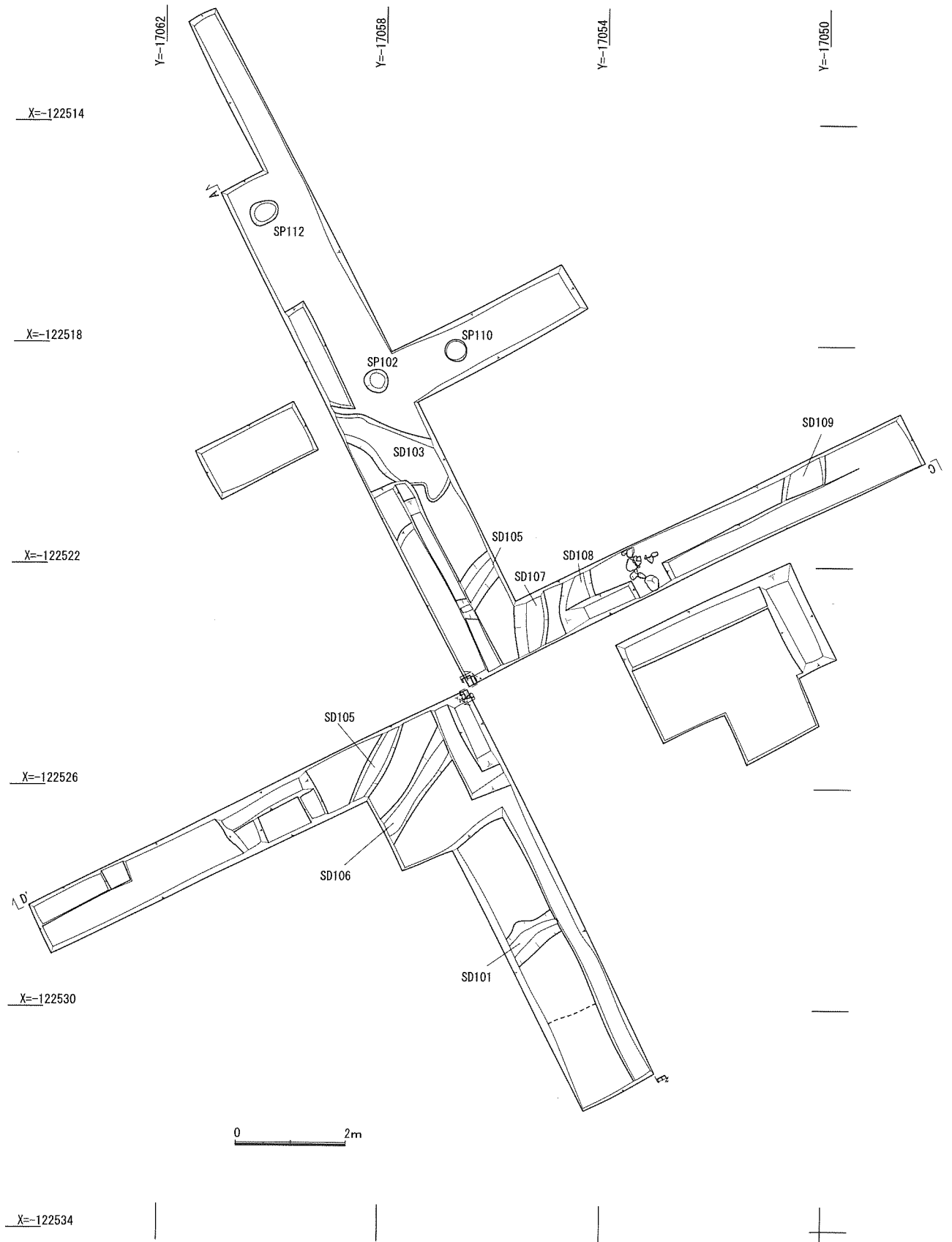


図 32 第 1 調査区平面図



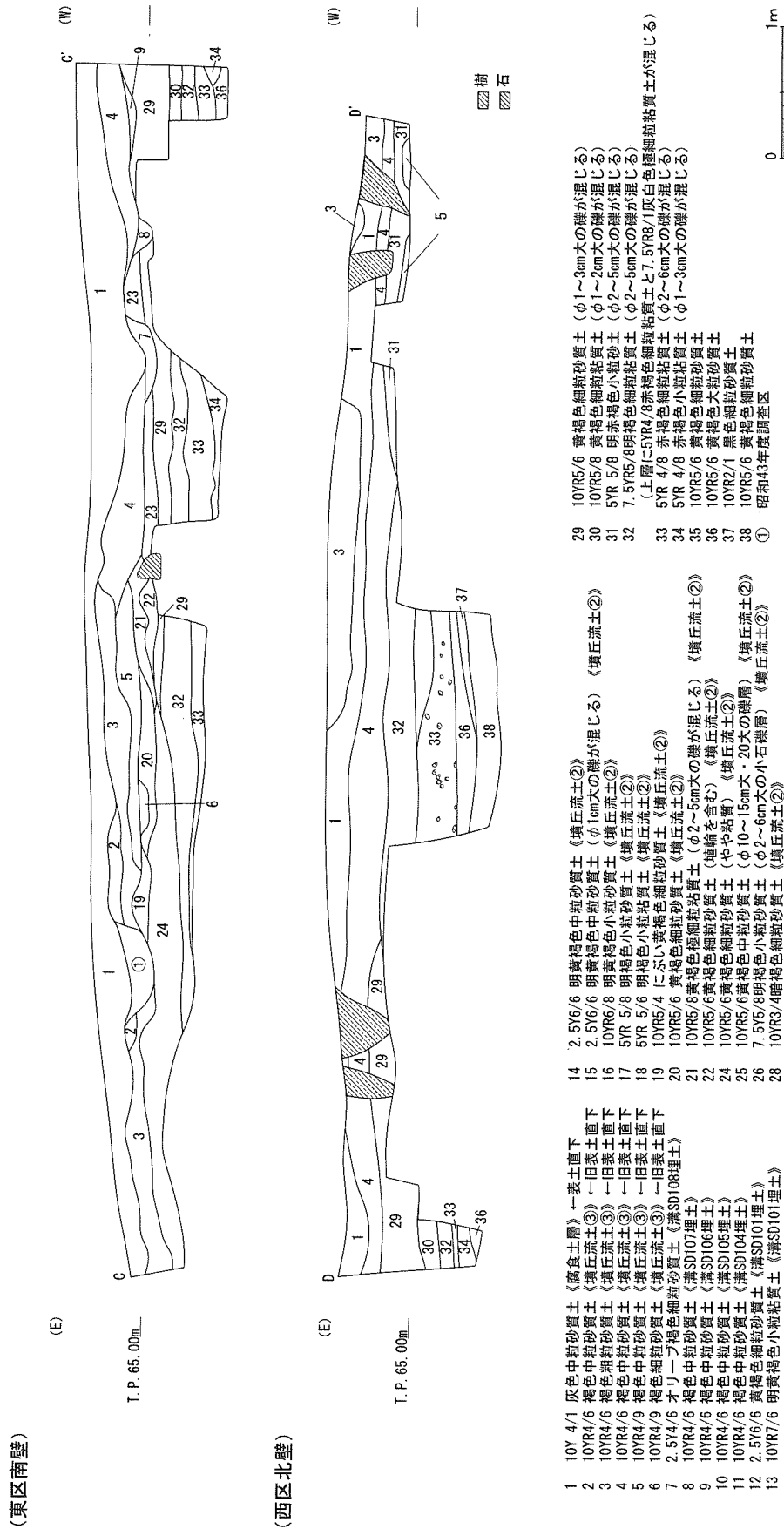


図 34 第 1 調査区東西方向断面図

えるほど規則性をもたない。石列の周囲には1～2cm大の礫と埴輪密小片が多量に散布している。時期は17世紀を下限とする。

# (6) 土坑 SK113

南北辺が墳丘裾に沿うような、いびつな長方形をした土坑である。東西長が約13m、南北長が約4m、深さ約0.8mを測る。地山を掘り込んでおり、また人為的な埋戻しが行われている。掘り込みは西区ではほぼ直角、北区、南区で約60度の傾斜で成されていることが確認できるが、東区では掘り込みが甘く、なだらかで明確な掘形をもたない。埋土は下から黄褐色、赤褐色、明褐色、黄褐色の粘土がおおよそ水平に堆積するが、しまりはない。自然堆積層は確認できず、

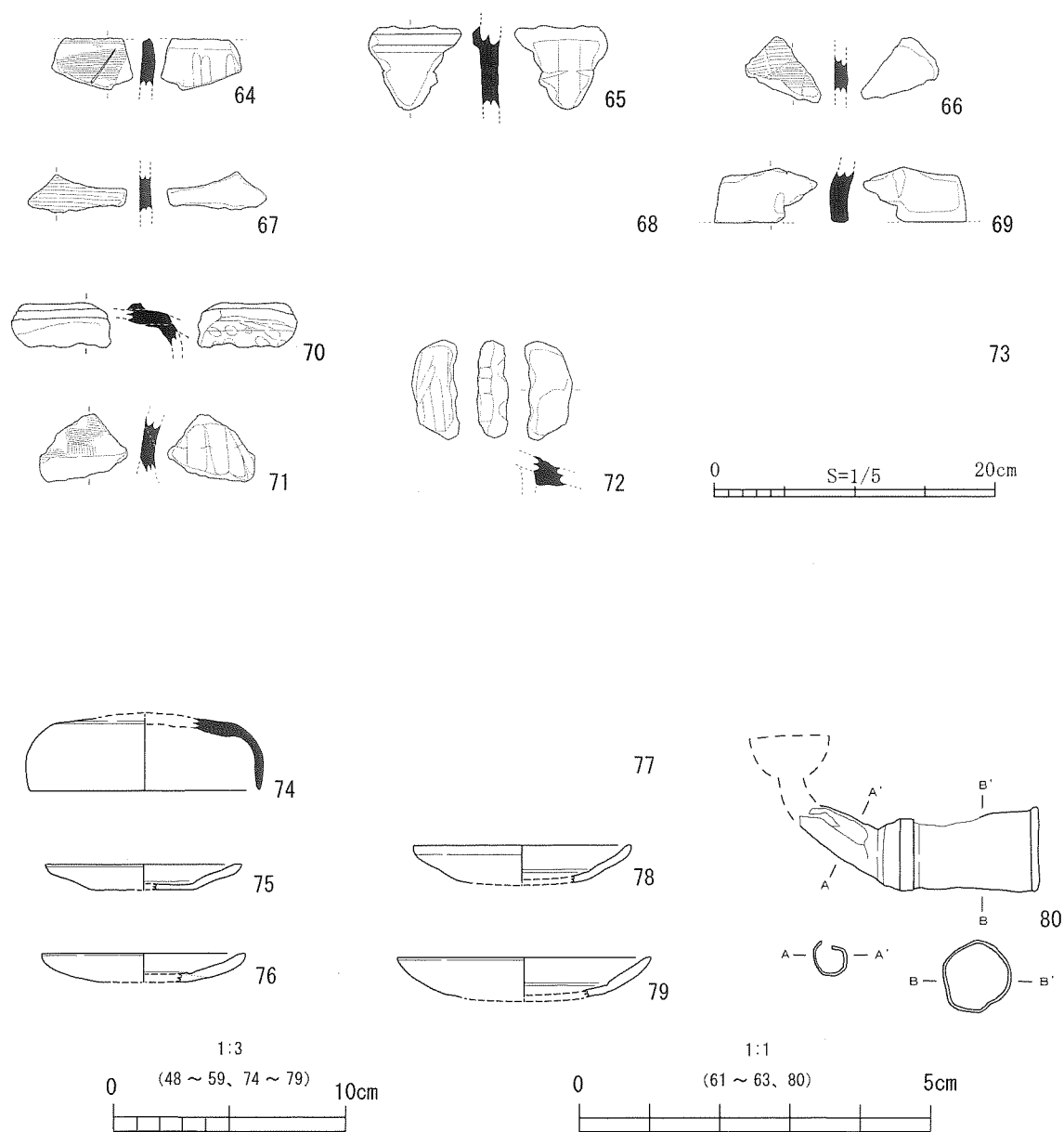


図 35 出土遺物実測図（北墳出土）

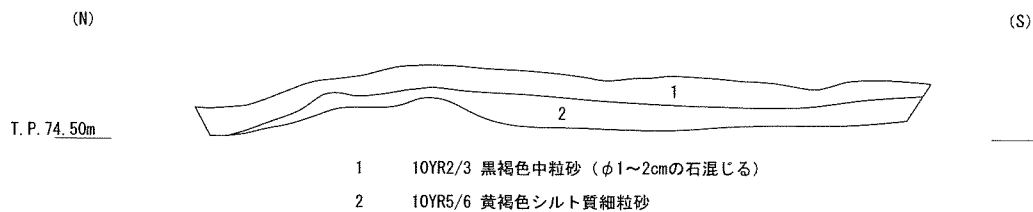
遺物が出土しなかったため、土坑は掘り込みを行ったあともなく埋戻されたと考えられる。時期は17世紀を下限とするが、詳細な時期は明らかでない。

### 出土遺物

本調査区では、墳丘の流土から主に埴輪が出土している。その他の遺物についても流土および表土より出土している。埴輪について器種は円筒埴輪、蓋形埴輪また蓋形埴輪と思われる形象埴輪があり、器種が不明なものも1点存在する。出土した埴輪の多くは小片であり表面も摩耗がみられるものが多い。その他遺物の須恵器や土師器についてほとんどが小片である。以下、遺物の詳細を記述する。なお観察表にも同じくまとめて報告する。

64は円筒埴輪の口縁部であり、外面にヨコハケ、内面にナデ調整をほどこす。さらに外面には線刻がみられる。65は円筒埴輪の突帯部で内面にナデ調整がほどこされる。66は円筒埴輪の一部で外面にヨコハケと線刻がある。67も円筒埴輪の一部で外面が黒くヨコハケがみられる。68・69は円筒埴輪の底部で、68については外面にタテハケ、内面にユビオサエ調整がみられる。70は蓋形埴輪の笠部で内面にユビオサエ調整がみられる。71は外面にタテハケののちにヨコハケ調整がなされ、内面にナデ調整がほどこされる。72は内面にナデ調整がある。ともに蓋形埴輪と思われる。73は外面が黒く器種については不明である。

#### (1トレンチ東壁)



#### (2トレンチ北壁)

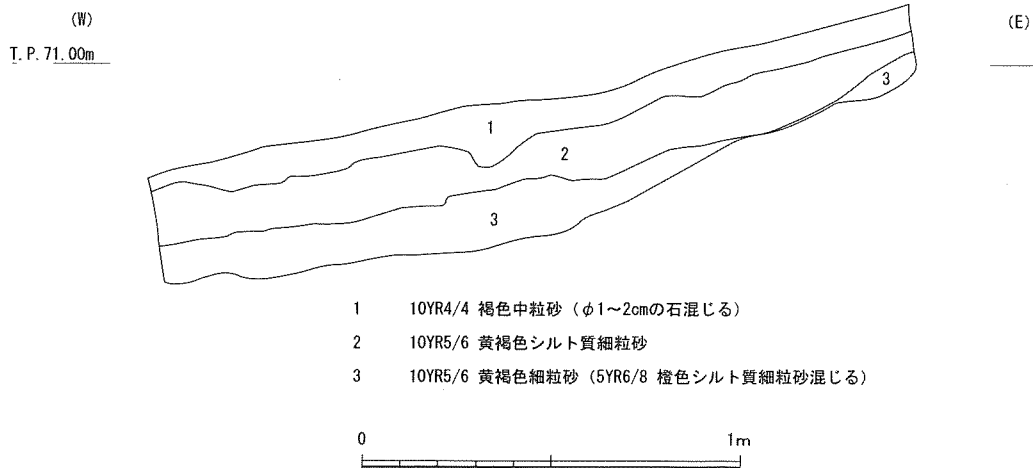


図36 山本古墳土層断面図

埴輪以外の遺物については、須恵器、土師器、煙管が出土している。74 は須恵器の杯蓋で外面にヘラケズリ調整がなされる。7 世紀中葉 (TK217 期)。75 ～ 79 はそれぞれ土師器の皿である。内面、外面ともにナデ調整がなされる。75・77 は 19 世紀中葉から後半 (京 X V)。76・78 は江戸時代のもものと比定できる。79 は 17 世紀前半～中葉。80 は銅製の煙管で 17 世紀初頭 (古泉 II)。

## 5 節 山本古墳の発掘調査

### 調査の目的と調査区の配置

山本古墳は宇治市宇治山本に位置する。山本古墳の保存を検討、遺跡の内容・範囲を確認するため調査を行った。調査区は東西南北の軸にそれぞれ 10m 四方で設け、その調査区の隅 2m 四方について掘削を行った。掘削を行ったトレンチは 2 つとなる。

### 調査成果

出土遺物は埴瓦と陶磁器が確認できたが、小片につき図化できるものはなかった。またトレンチについては掘削して間もなく山の岩盤が確認でき、遺構は確認することが出来なかった。

## 6 節 発掘調査成果のまとめ

今回の発掘調査は、南墳においては墳形を確認すること、北墳においては古墳北西部の平坦面が造り出しであるのかを確認することであった。

南墳の調査では、各トレンチにおいて弧状に巡る墳裾を確認し、南墳が円墳であることが確認された。円墳か方墳かが確認できなかったのは、近世における地形の改変によるものと思われる。

北墳の調査では、石列を検出しこれが造り出し係るものかとも考えたが、墳丘まで続かず造り出しはないものと判断した。

調査の中で課題となったのは、南墳から出土した埴輪や須恵器の時期の問題である。これらの遺物は、北墳の年代に合うものであり、南墳の副葬品とは時期が異なる。このことをどう解釈するのが問題である。

また、南墳の墳丘の改編の原因となったのが、近世において何らかの建物を作ったことと考えられるが、どういった性格の建物だったのかが一つの課題である。二子山古墳では前回の調査で中世墓を検出している。つまり古墳時代以後も墓域として利用されていたことになる。

二子山古墳の北東にある池山古墳では、調査の結果古墳でないことが明らかになったが、墳頂に近世の建物があったことがわかり、さらにその周辺では中世墓があることが分かっている。さらにその東では奈良時代の火葬墓を検出しており、二子山古墳周辺が大規模な墓域として利用されていた可能性がある。二子山古墳においても同様に墓域として近世まで利用されていた可能性があり、今後検証する必要がある。

## 5章 総括

### 1節 二子山古墳周辺の状況

今回の発掘調査で、二子山古墳は北墳が直径 40m、南墳が東西 34m、南北 30mの円墳であることが明らかとなった。それでは二子山古墳は山城地域の中でどう位置づけられるのか。

旧山城国は、大きくは3地域に分けられると考えられる。つまり宇治川以南の南山城地域、桂川流域の山城北西部、宇治川右岸の山城北東部の3地域である。南山城や山城北西部の乙訓地域は、大型の前方後円墳や前方後方墳が築造され、都出比呂志や和田晴吾の研究に見るように、古墳時代研究のモデルとして扱われた地域である。それに引き替え山城北東部の地域は、古墳に関する情報の少なさも相まって、あまり研究の進んでいない地域である。この地域は、古くから市街地化が進んでいるため、今後新たな古墳の発見があるかもしれないが、主に紀伊郡域と宇治郡域に古墳が見られる。

宇治市域は旧郡名では宇治川によって宇治郡と久世郡に分かれ、久世郡は南山城地域に、宇治郡は山城北東部地域に分けられる。広野町の一本松古墳や庵寺山古墳は久津川古墳群の一支群と見られている。

旧宇治郡は南北に長い郡で、宇治川右岸の地域と山科盆地を含んだ郡域である。宇治郡域の古墳の変遷は、古墳時代前・中期には山科盆地には全く古墳が見られず、宇治川右岸域のみに見られる。宇治川右岸域は大きく2地域に分かれ、北部の木幡地域と南部の菟道地域に分けられる。

前期では、木幡地域の旧巨椋池をのぞむ桃山丘陵上に黄金塚古墳群が築造される。2基の前方後円墳があったとみられているが、1号墳については古くに破壊されているため内容は不明だが、2号墳については花園大学により墳裾の調査が行われ、前期末の築造であることがわかっている。菟道地域では、三室戸寺の背後の宇治川渡河点を望む丘陵上に円墳の観音山古墳が築造される。墳丘の調査のみで遺物が明らかでないため明確な時期は分らないが、堅穴式石槨を持つことがわかっており、前期の古墳であろう。その後、菟道地域では二子山古墳が、木幡地域では瓦塚古墳の円墳が築造される。後期になると、木幡地域の二子塚古墳、菟道地域の門ノ前古墳と前方後円墳が築造される。さらに二子塚古墳に続いて120基を越える群集墳の木幡古墳群が築造される。木幡古墳群はその多くが宮内庁の陵墓参考地となっており詳細は不明だが、20m前後の円墳も多くみられる。なかには、前方後円墳と考えられる古墳もあり、再評価が必要である。山城北東部は、古墳時代前・中期には大型の前方後円墳は築造されず、後期の二子塚古墳に至って山城地域最大の前方後円墳が造られる。

### 2節 山城地域の状況

山城地域では、まず古墳時代前期前半に南山城の相楽南部において全長 175mの椿井大塚山古

墳が築造される。また山城北西部の乙訓では、全長 91m の五塚原古墳が築造される。相楽南部では、椿井大塚山古墳の後平尾城山古墳が築造されるが、このあと前方後円墳の築造はなくなる。乙訓では元稲荷古墳・寺戸大塚古墳・妙見山古墳と前方後円墳・前方後方墳が築造されるが、前期前半で前方後円墳の築造が止まる。

前期後半になると、各地で 100m 以下の前方後円墳が築造される。八幡では東車塚古墳、西車塚古墳が、田辺では飯岡車塚古墳、城陽では西山 1 号墳や梅ノ子塚 1 号墳などが築造される。

中期に入ると、乙訓に全長 128m の恵解山古墳が築造される。その後城陽に全長 180m の久津川車塚古墳が築造され、続いて全長 115m の芭蕉塚古墳が築造される。この久津川古墳群が築造された時期には、山城地域にはほとんど前方後円墳が造られなくなる。つまり山城地域全域に影響を及ぼし、それまでの首長系譜の再編が行われたものと考えられる。二子山古墳はまさにこの時期のものであり、豊富な副葬品にも関わらず 40m 程度の円墳であるのはこうした規制を受けたものと思われる。

### 3 節 今回の調査における新たな疑問

今回の調査で浮上した新たな疑問は、南墳から出土した埴輪と須恵器である。これらの遺物は原位置で出土したものはなく、どのように配置されていたのかはわからない。このような中で以下の疑問がある。

- 1 埴輪や須恵器の年代は、北墳の年代と合致するもので、南墳の副葬品より古い。
- 2 埴輪は形象埴輪が圧倒的に多く、円筒埴輪が少ない。

これらの疑問を解決するため、いくつかの可能性が考えられる。

- ① 南墳は北墳を築造した際に地山を削りだした後の残丘で、この残丘上で北墳の埴輪祭祀を行った。
- ② 南墳は、北墳と近い時期に築造され、未発見の埋葬施設がある。

②については、昭和 42 年の発掘調査で南墳の墳頂はほぼ全面を掘削しており、可能性は低いものと思われる。①についてはさらに調査する必要があるだろう。